http://www.music-communication.com

神戸女学院大学　東京音楽大学　昭和音楽大学

音楽系３大学による共同プロジェクト

音大連携による教育イノベーション

音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成24年度 活動報告書

ミュージック・コミュニケーション講座

３大学合同夏期セミナー

シンポジウム「音楽とアートでひろげるコミュニケーションの力」

英国交換留学生によるワークショップ

英国学生派遣報告

このプロジェクトは文部科学省平成21年度大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラムに選定されました。

目　次

はじめに …… 2

Ⅰ．平成 24 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」…… 4
1．第１回　ワークショップと学習論 …… 4
2．第２回　ワークショップの実践 …… 6
3．第３回　だれでもコリオグラファー！！からだでコミュニケーション …… 8
4．３大学合同夏期セミナー 2012 …… 10
5．公開プレゼンテーション＆シンポジウム …… 12
6．第４回　いまアーティストに求められるものとは～社会の中でアーティストが果たすべき役割 …… 18
7．第５回　音楽とコミュニケーション～音楽を伝えるということ～ …… 20

Ⅱ．平成 24 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」教育効果測定 … 22

Ⅲ．「音楽ワークショップ集中研修」ならびに「子どものための音楽作りワークショップ」… 30

Ⅳ．ギルドホール音楽演劇学校／バービカンセンター主催 Dialogue Project　参加報告…… 34

Ⅴ．仲道郁代学校訪問ワークショップ…… 40

資料編…… 42
新聞・雑誌等掲載記事 …… 42

おわりに …… 44

はじめに

神戸女学院大学音楽学部・昭和音楽大学・東京音楽大学による連携事業「音大連携による教育イノベーション　音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」は、今年度で４年目、文部科学省による支援期間終了後の初めての年度でした。この取組は、音楽系の３つの大学がそれぞれの特性を生かしながら、卒業後に音楽を生かして社会で活躍できる人材、また高度な芸術性の追求のみならず音楽がもつ本来の力（人を癒し、結びつけ、元気づける力）を意識し、コミュニケーション・ツールとして音楽を見る広い視野をもつ人材、すなわち「音楽コミュニケーション・リーダー」の養成をめざすものです。

今年度も、昨年度に引き続き、大学間をインターネット・ビデオ会議システムでつないだ共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座※」と、３大学の学生が東京音楽大学で一堂に会する夏期セミナーを実施しました。夏期セミナーについては、大和日英基金と日本音楽財団からの助成を得たことにより、ギルドホール音楽演劇学校から３名の講師を招聘することが可能となり、また大和日英基金の助成により10月と２月に日英の教員と学生の交流訪問が実現しました。さらに教育の成果を生かす実践の場として、ピアニストの仲道郁代さんが行っている学校訪問ワークショップに学生が参加・協力する機会を複数回提供していただき、公立小学校という現場で創作的協働の貴重な体験を得ることができました。このように、本事業が多くの方々からのご支援とご協力のもとに遂行できたことに、心より御礼を申し上げます。

本報告書は、今年度の活動内容をまとめたものです。音楽・芸術・教育に関わる方々に広くご高覧いただき、今後の展開に向けて皆様からのご助言とご指導をいただけましたら大変ありがたく存じます。

平成25年３月

音楽系３大学連携事業　取組責任者
武石　みどり
（東京音楽大学・教授）

※開講科目名
ミュージック・コミュニケーション講座Ⅰ・Ⅱ（東京音楽大学）
音楽コミュニケーション①・②（昭和音楽大学）
ミュージック・コミュニケーション講座（神戸女学院大学）

３大学連携事業

教員・スタッフ（平成 25 年 3 月現在）

東京音楽大学	武石　みどり	東京音楽大学音楽学部	教授
	村中　洋子	〃	教授
	上條　浩史	〃	連携センター　スタッフ
神戸女学院大学	津上　智実	神戸女学院大学音楽学部	教授
	木村　明	〃	連携ルーム　スタッフ
	永吉　りう子	〃	連携ルーム　スタッフ
昭和音楽大学	武濤　京子	昭和音楽大学音楽学部	教授
	赤木　舞	〃	専任講師
	佐藤　良子	〃	助教

３大学連携研究会

メンバー（平成 25 年 3 月現在）

東京音楽大学	武石　みどり
神戸女学院大学	津上　智実
昭和音楽大学	武濤　京子、赤木　舞、佐藤　良子

平成 24 年度の活動

●ミュージック・コミュニケーション講座の実施

合同夏期セミナー以外の講座は、いずれもインターネット・ビデオ会議システムにより、3大学間を結んで実施。

オリエンテーション：平成24年5月9日(水)	発信校：東京音楽大学
第1回：平成24年5月16日（水）	発信校：東京音楽大学
第2回：平成24年5月30日（水）	発信校：東京音楽大学
第3回：平成24年6月13日（水）	発信校：神戸女学院大学
3大学合同夏期セミナーガイダンス：平成24年6月27日（水）	発信校：東京音楽大学
3大学合同夏期セミナー：平成24年8月29日（水）～9月1日（土）	於：東京音楽大学
第4回：平成24年10月3日（水）	発信校：昭和音楽大学
第5回：平成24年12月5日（水）	発信校：昭和音楽大学

●その他の活動

仲道郁代ワークショップ参加：　平成24年６月 於：久喜市、９月 於：武蔵村山市、尾道市
公開シンポジウム「音楽とアートで広げるコミュニケーションの力」：平成24年９月１日（土）於：東京音楽大学
「音楽ワークショップ集中研修」ならびに「子どものための音楽作りワークショップ」：
平成24年10月16日（火）～10月20日（土）於：神戸女学院大学
Dialogue Project参加：　平成25年２月18日（月）～２月27日（水）於：ロンドン市東部

平成 24 年度 第１回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第１回ミュージック・コミュニケーション講座 「ワークショップと学習論」
講　師	苅宿　俊文（青山学院大学教授）
実施日時	2012 年 5 月 16 日（水）18:30 ～ 20:00
実施場所	東京音楽大学　A館地下 100
講座の概要	３大学共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」の第１回は、昨年に引き続き青山学院大学教授の苅宿俊文氏を講師として、東京音楽大学にて実施した。 講義は「ワークショップと学習論」と題して、教育学・社会学の視点から、まず音楽家が社会に出ることの意味を問いかけ、その上で「ワークショップの定義」「ワークショップを支える学習観」「ワークショップが求められる背景」の３点を軸に展開された。 最初に現在の社会変化の流れを踏まえながら、アウトリーチおよびワークショップの定義、そのあり方についての説明があり、次にワークショップを支える学習観という点で、現在の教育現場における変化について論じられた。社会が変わろうとしている中で、教育も変わろうとの傾向にあり、これまでの「できる＝行動主義」「わかる＝認知主義」といった獲得型の学習観に、「分かち合う＝社会構成主義」という学習観が加わり、知識と結果だけではなくその意味を理解し、コミュニティで共有することの重要性が増したことが指摘された。 さらに、これまでの 50 年間とこれからの 50 年間の社会変化にも言及し、ライフスタイルの変化、高齢化社会、日本における人口の減少と多国籍化などにともなって、これからの日本では「物によって満たされる幸せ」ではなく、広く社会や身近な他者の何かに貢献ができ、社会や他者から必要とされる「絆」を喜びとする生き方が求められていること、また、その実現において音楽ワークショップに大きな可能性があることが強調された。 最後に「音楽家、あるいはクラシック音楽が持つ市民性、公共性とは何か？」「音楽家という仕事が生まれる産業構造は？」「音楽の専門家という意味は？」「クラシック音楽は社会をどう救えるのか？」といった多様な問題提起があり、講座を終了した。

〈学生のことば〉

・「正解」ではなく「それぞれの中にある答え」を共有することの大切さがわかった。仕組みが多少難しいところもあったが、獲得型でなく参加型のＷＳ、そして私たちがこれから生きていく社会の変化に対応できる力を目指していきたい。（東京/作曲指揮/1年）

・学校で生活する中で、「正しい」か「間違っている」か、どちらかの答えを見つけるのに必死だった。その延長線上で、このどちらかに分けられないものも、自分で勝手に分け、決めつけていたのかと思った。（昭和/アートマネジメント/１年）

・今は、学校や塾などで正しい答えを教えることが多くなっているが、現在生活の中で求められるのは、何が正しいか分からず、そもそも答えがあるか分からないことも多い。自分が参加、体験して様々なものを作りだしたり、答えまでの道を模索したりす

ることができるなら、自分が今まで体験しなかったようなジャンルのワークショップを受けたいと、この授業を通し、ワークショップにさらに興味を持った。

（神戸/舞踊/1年）

・正しい答えがあるものだけを追求していくのではなく、ワークショップを手段として使い、音楽の楽しさ・驚き・感動を伝えることに「正しい・正しくない」はない。自分が納得するかしないかで価値を認めていく、決めていくという考えは今まで聞いたことのない新しいお話でした。今後の講義を受けるにあたって、視野が広がり、授業により興味を持つことができました。

（東京/声楽/1年）

・「自分の中に答えがある」という言葉が強く胸に響いた。学校での教育とは違う、自分の考えを大事にするという学びは良いと思った。その考えを発信することに意味があるのだと思った。　（昭和/ピアノ/１年）

・「ワークショップ」といえば「参加型の講義のようなもの」というなんとなくのイメージしか持っていなかったのですが、今回きちんとした定義を学んだことで、ワークショップという方法自体が持つ目的が、とても意義のある事だと感じました。ワークショップの様々な場面で本当に協同性や自己原因性感覚などが養われるのかどうか、実践して体感したいと思いました。

（神戸/トロンボーン/4年）

※写真は東京音楽大学の様子です。

平成 24 年度 第2回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 2 回ミュージック・コミュニケーション講座 「ワークショップの実践」
講　師	片岡　祐介（打楽器奏者・作曲家）
実施日時	2012 年 5 月 30 日（水）18:30 ～ 20:00
実施場所	東京音楽大学　A館地下 100
講座の概要	３大学共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」の第 2 回は、打楽器奏者・作曲家であり、障害者施設や高齢者施設、病院などの様々な場所で、即興音楽セッションを行ってこられた片岡祐介氏を講師として、東京音楽大学にて実施した。 第１回講座の理論的学習に続いて、今回は実際に音楽ワークショップがどのような場でいかに実践されているのかを知り、その一端を体験してみるという内容であった。 最初に片岡氏の自己紹介からはじまり、打楽器を始めたきっかけから音楽大学入学まで、音楽大学入学後の西洋音楽以外への関心や、音楽観などについて体験談を交えて語っていただいた。また片岡氏がこれまで行ってきた実際のワークショップを映像で紹介した。後半は３校合同での即興演奏によるワークショップを行い、片岡氏のリードの下に即興による音楽づくりを体験し、これまでの講座の内容を、実際の演奏やアクティビティによって感じ取ることが出来た。 片岡氏が養護施設等で行ってきたワークショップの映像からわかるのは、「まず音楽」ではなく「まず人と向き合う」という姿勢である。ランダムに音を連打したり、また楽器に拒否反応を示したりする多様な人々と向き合い、無秩序な騒音に聞こえるものの中に辛抱強く一人ひとりの音を聞き分ける過程の中で、皆がそれとなくお互いに聴き合うことを始め、「音楽」が生まれてくる。多分に感覚的ではあるが、同じ時間を共有している人々すべてに（特に二つの画面の向こう側にも念入りに）目を配りながら、一緒にできることをその場で工夫・創出していく片岡氏の方法は、言葉による詳細な説明はなくとも、ワークショップリーダーにとって重要な姿勢と資質を明確に示すものであった。 即興演奏を初めて体験する学生には最初戸惑いも見られたが、講座を進めていくにつれてその雰囲気にも慣れ、さまざまな手段により何かを表現したり互いにキャッチボールしたりすること――音楽が本来もっている働きであるが、クラシック音楽の教育の中で技術的な課題の蔭に隠れがちである――の楽しさを覚えていったように感じられた。 IV 会議システムを使っての３地点同時ワークショップということで、演奏の際のタイミング等の不一致などが懸念されたが、片岡氏の配慮もあり、実際の講座ではそれほどストレスを感じることなく行うことが出来た。今後、参加者がそれぞれ別の会場よりインターネットを通じて参加できる遠隔ワークショップなどの可能性が感じられた。

〈学生のことば〉

・片岡先生の活動のビデオで、子どもやお年よりの方が生き生きしていたことから、やはり人間にとって音楽は共存していくべきものだと思いました。　（神戸/声楽/３年）

・即興で音楽を演奏することの楽しさ、ワークショップの仕組みというか楽しむことの重要性、インスパイアされることの中身が面白くて勉強になりました。
（東京/作曲指揮/１年）

・画面を通して音楽を作っていったのは初めての経験だったので楽しかったです。違う音色でバラバラに演奏したけど音が生き生きとしていたと思います。
（昭和/フルート/１年）

・ビデオを見て毎回のセッションが全く違うものになっていることが、すごいと思った。引き出しはたくさんあるけれど、それを使わないことが違うものになるコツなのだろうと思った。セッションの間は楽しくて、体が勝手に動いてしまった。
（神戸/舞踊/１年）

・その場でいろいろ決めずに演奏を始めるということが初めてだったので、最初は戸惑いましたが、楽しかったです。
（東京/ヴァイオリン/２年）

・「人間に合わせて、音楽を作っていく」というキーワードが印象に残りました。決められたものではなくて、自由にやることの楽しさを感じました。音楽にとらわれずに自分で作り出すことで、より生き生きとした音楽になると思いました。
（昭和/ピアノ/１年）

・インターネット・ビデオ会議システムを使って、３大学で1つの曲を作るという事が実現できて非常に楽しかったです。初めは、回線などの問題で難しいのではないかと思っていましたが、片岡先生の即興的な指示によって1つの曲を作り上げられた事が勉強になりました。また、その状況、メンバー、場所でしか作れない1つの音楽を、アイディアを即興で作り、指揮者となる片岡先生のご指導が非常に心に残りました。
（神戸/トロンボーン/４年）

※写真は東京音楽大学の様子です。

平成 24 年度 第3回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 3 回ミュージック・コミュニケーション講座 「だれでもコリオグラファー！！からだでコミュニケーション」
講　師	北村　成美（ダンサー / コリオグラファー） 〈アシスタント〉昭和音大:西岡　樹里（ダンサー）、東京音大:田中　幸恵（ダンサー）
実施日時	2012 年 6 月 13 日（水）18:30 ～ 20:00
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 オルチン館
講座の概要	３大学共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」の第３回は、ダンサーでコリオグラファーの北村成美を講師に神戸女学院に招き、アシスタントのダンサーを他の２校へそれぞれ配置する形で実施した。 講座は身体を使ったダンス・ワークショップと、その解説の二部構成で進められた。まず講師らと学生たちが、一人ずつ順に画面を通じて簡単な自己紹介を行った。その後、北村氏の「どうぞ！」という掛け声と共に、突如各会場で講師らが身体を動かし始めた。言葉なしに始まったことに当初戸惑いを隠せなかった学生たちだったが、次第に講師の動きに倣い、ジャンプしたり、手足をブラブラさせたり、大きく息をしたり、円になったりと呼吸を合わせながら積極的に身体を動かすようになった。 また、ペアになって相手の身体の関節を動かし自由に人間オブジェを創るアクティビティでは、手を叩いて相手にリセットを知らせる際、相手と自分の目線をしっかり合わせて合図を送らなければ伝わらないということを、講師は言葉で説明するのではなく、繰り返し行わせることで体感させた。 この講座で行われたアクティビティは全て、ほとんど言葉で説明されることなく行われたので、学生たちは講師の動きをよく見て、次にすることを汲みとりながら取り組んでいった。当初は不安げに周囲の様子を伺いながら動いていた学生たちだが、徐々に固さもほぐれ、各校ごとに創り上げたダンスを順に披露した場面では、それぞれのアイディアを満載に盛り込んだ、学校ごとの個性が豊かに表れた作品を、楽しみながら踊る様子が見受けられた。 ワークショップ終了後、北村氏は、「遠隔地だから直接見たり触れたりはできないけれど、一人一人の言葉の発し方でみんながどれほど楽しんだのかちゃんと伝わってくる」「言葉は誰もが日常で使うけれど、『自分の言葉』として話されていないものも多い」と述べ、「言葉を多用しないことで相手の身体を通じて引き出されるものがある」「『円になれ』と言ってできた円と『みんなの顔が見える形になって』といってできた円は違う」とワークショップの意図を語った。 最後には参加者全員がカメラの前に並んで正座し、北村氏の「みなさん！」の言葉に続き、全員が呼吸を揃えて「ありがとうございました」と発しながら深々と礼をし、講座は締め括られた。

〈学生のことば〉

・言葉を使わなくても身体の動きやアイコンタクト、表情、息遣いなどでこんなにもコミュニケーションが取れるのだと感じました。逆に、言葉を使わないからこそ周りの気配を敏感にキャッチできるのだとも思いました。　（神戸／トロンボーン／4年）

・元々ダンスなど身体で何かを表現することが苦手で、（中略）今日も最初のうちは抵抗がありましたが、先生のパワー、後輩のパワーを頂いて、気付いたら必死になって動いていました。何も考えずに取り敢えず動く！ということの大事さに気付くことができました。　（神戸／ピアノ／4年）

・その場その場の雰囲気をもっと感じられるように、他の人もその中に引き込めるようにしたいです。コミュニケーションをはかる時、相手のペースに合わせるということを常に意識したいです。（神戸／声楽／3年）

・人に自分をわかってもらいたかったら、相手にわかりやすいように合図を送らなければいけないと思った。人の身体に触れることはあまりないので、どの程度動かして良いのかと迷ったが、それも相手のことを良く見てやらないといけないと分かった。
（神戸／舞踊／1年）

・様々な表現方法があることを知ったので、頭を柔軟にして色々な発想を出していけたらもっと色々な活動ができるのではないかと思った。身体を使う楽しさを再確認できたので、何かそこを取り入れていけたら良いなと思った。（東京／ピアノ／3年）

・本気で心からの感情を音楽にぶつけてみたいです。（東京／ピアノ／2年）

・言葉で伝えてしまっては本来持っている意味や「間」が失われてしまうこともあるので、言葉を使う時、使わない時の使い分けが大切だと思った。
（東京／作曲指揮／1年）

・最初は無言である上に激しい動きで戸惑いましたが、だんだん楽しくなってきて、アイディアを出し合ってダンスしたのが一番印象に残りました。
（昭和／トランペット／1年）

・言葉で説明しなくても一体感が生まれるのだとびっくりしました。あまり話したことがない人とも、身体を動かすことを通じてぐんと距離が縮まった感じがしました。とても楽しかったです。
（昭和／ピアノ／1年）

・大人数でひとつのことをやらなければいけない時、または何かを伝えて共有しなければいけない時に活かしたい。
（昭和／ピアノ／1年）

※写真は神戸女学院の様子です。

３大学合同夏期セミナー 2012

催事の名称	３大学合同夏期セミナー
講　師	ショーン・グレゴリー Sean Gregory（作曲家、16 頁参照） デッタ・ダンフォード Detta Danford（作曲家、フルート奏者） ナターシャ・ジエラジンスキ Natasha Zielazinski（作曲家、チェロ奏者）
実施期間	2012 年 8 月 29 日（水）～ 2012 年 9 月 1 日（土）
実施場所	東京音楽大学Ｂ館
共　催	東京音楽大学、神戸女学院大学音楽学部、昭和音楽大学
セミナーの概要	本セミナーでは、音楽によるコミュニケーションの新しい方法を学ぶワークショップを実施するとともに、このような取組を広く周知し、新しい教育活動の可能性について考えるためのシンポジウムを同時開催した。 講師は、昨年に続き、ギルドホール音楽演劇学校およびバービカンセンターにおいて「クリエイティブ・ラーニング」プログラムを推進するショーン・グレゴリー氏と、同氏のもとで豊富なワークショップ経験を持つ若手ワークショップ・リーダー２名である。 講師および３大学の学生と一般参加者が初めて顔を合わせた初日は、講師がリードするアイスブレイキングで、自然に互いの心がほぐれ、これから始まるグループ活動の場づくりが行われた。2 日目からは、「東京」からイメージする「空」「通り」「地下」を表現する音楽づくりに入った。参加者は３つのグループに分かれ、各々楽器を手に、グループ内でディスカッションをしながらメロディや歌詞、リズムを創作する。講師は、自由な雰囲気の中で、他者のアイデアを受け入れつつ自分の考えも述べる、すなわち協働のプロセスの要となるコミュニケーションについて、巧みなリーダーシップで参加者を導いていた。 ３日目、４日目には南池袋小学校の児童を迎え、参加者が子どもたちをリードして、「空」「通り」「地下」の音楽づくりを一緒に体験した。4 日目の「公開プレゼンテーション」はまさに参加者がセミナーの成果を発揮する場となり、多くの一般参観者の前で、子どもたちとともに生き生きと表現していた。 同時開催されたシンポジウムでは、以上のような音楽ワークショップによって生まれるコミュニケーションを重視し、こうした取組を通してコミュニケーション力を育成し、その力を社会で生かしていく方法について、音楽･アート･教育等の分野から有識者を招き、報告および議論が行われた。これらを終え、講師と学生による総括では、学生から、前向きに自分たちの力で活動していきたいという発言が多数寄せられ、先進的な取組への期待感を持ってセミナーが締めくくられた。

〈学生のことば〉

・言葉を用いずに動作やアイコンタクトで初対面の人たちを一体とさせていくすごさに感動した。それは身体的にも精神的にも準備することで、個人を認識するだけでなく、身体全体で“聴いて”信頼を築いていくことにつながる。　（東京/作曲指揮/1年）

・今回のワークショップでは音楽を通して人とつながることができるということを学びました。時間は短かったけど、短時間でこんなに素晴らしい音楽が作れることに驚きました。また、初対面の人とのコミュニケーションやリーダーシップの取り方、さらには、アイディアが行き詰まった時のアイディアの引き出し方も勉強になりました。　（昭和/フルート/1年）

・ワークショップの中でのリーダーシップとは、ただ前に立って引っ張っていくだけで

なく、1人1人のことを良く見て、アイディアを引き出してまとめることが重要だと学んだ。先生方は雰囲気を盛り上げたり、ほめたりしながら素晴らしいリーダーシップをとっていた。（神戸/トロンボーン/4年）

・子どもたちの小さなアイディアを見逃さないようにしよう！と思って臨んでいました。しかし一緒に率いていた方たちがどんどん引き出しているのを見て、自分の視野はまだ狭いなと思います。
（東京/ピアノ/2年）

・ディスカッションによって他の人に自分の意見を伝えたり、他の人の意見を受け入れる大切さがわかりました。意見を共有することによってグループ全体が良くなっていくのを体験し、今後に活かしていきたいと思いました。
（昭和/アートマネジメント/1年）

・子どもたちと触れ合うという点で、今までの私だとまだまだ積極性に欠けていて、思うように子どもたちと打ち解けることができていませんでした。しかし、今回のセミナーで1日1日を過ごしていくうちに、少しではありますが自分の殻をやぶることができ、子どもたちと触れ合う時に積極的に動けたと思います。それはセミナーで学んだたくさんのことも糧となった気がしますが、他の人の動きなどを見て影響を受けたことも大きな要因だと思います。
（神戸/ピアノ/4年）

・どんどんＷＳに参加して実際にリードしていく立場になっていきたいです。また更に別のＷＳにも参加して勉強を深めたいです。（東京/ピアノ/2年）

・人との関わり方、また自分から意見を伝える積極性を学ぶことができました。小学生たちとワークショップをした時、エネルギッシュな子どもたちに圧倒されて思ったよりうまくできなかったので、経験を積んでいかなければならないと思いました。次にこのような機会があったら今回学んだ人との関わり方を活かして、改善できることは改善していきたいと思いました。
（昭和/フルート/1年）

・もっとたくさんの子どもたちと出会って、一緒に楽しくワークショップをしたいと思いますが、私自身が学んだこのワークショップの手法を、音楽を専門に勉強している大学生や、教育などに関心を持っている大学生などに伝えられたら良いと思います。まだまだ知識や経験も少ないけど、少しでもワークショップの素晴らしさを伝えられて、少しでも関心を持つ人が増えることで、ワークショップの輪が広がると良いと思います。（神戸/ピアノ/4年）

公開プレゼンテーション＆シンポジウム

■公開プレゼンテーション「クリエイティブ・ラーニング＠東京音大」

日時：2012年9月1日（土）11:15～12:00
会場：東京音楽大学　B館スタジオ

8月29日（水）から8月31日（金）にかけてのセミナーで、ギルドホール音楽演劇学校がロンドンで展開している「クリエイティブ・ラーニング」の方法を学んだ学生達（東京音楽大学、神戸女学院大学、昭和音楽大学）がファシリテーターとなり、小学生とのワークショップを行い、その成果を発表した（セミナー内容については10頁、11頁を参照）。

～プレゼンテーション参観者の感想から～

・子どもも学生さんもイキイキしていて楽しそうでした。ワークショップ自体の動画なども、もし公開されればぜひ拝見したいです。
・音大生も子どもも楽しそう。
・はじめて見ました。面白かったです。演劇のインプロに似ているなぁと直感的に思いました。
・短い練習であそこまでまとめるのは素晴らしい指導力だと思いました。
・子どもと一緒にプレイした学生の感想も聞きたかった。

■公開シンポジウム
「音楽とアートでひろげるコミュニケーションの力」

日時：2012年9月1日（土）14:00～16:00
会場：東京音楽大学　B館スタジオ
主催：東京音楽大学・神戸女学院大学・昭和音楽大学
助成：大和日英基金、日本音楽財団
協力：ブリティッシュ・カウンシル

目的：音楽やアートを通して人の心を開き、つないでいくためのコミュニケーション力の育成方法や、その力を社会で生かすための方法と意義について、日英の先進的事例を紹介し、音楽・アート・教育等他分野の関係者の議論を通じて、日本における新しい教育活動の可能性について考える。

参加者数：90名
（内訳）一般　43名
　　３大学学生　20名
　　３大学関係者等　27名

＜ご挨拶＞東京音楽大学教授　武石みどり

これまで３大学で行ってきた取組の拡がりをベースに、午前中に教育実践の成果（クリエイティブ・ラーニング）を見ていただいた。午後のシンポジウムでは、海外や他の芸術分野の先進的事例の報告を出発点として、将来の音楽・音楽教育についてディスカッションを行いたい。この一連の取組に助成いただいた大和日英基金と日本音楽財団に感謝申し上げる。

＜事例報告（概要）＞

１．ショーン・グレゴリー：バービカンセンター＆ギルドホール音楽演劇学校クリエイティブ・ラーニング・ディレクター

〔パートナーシップを通じた変革～音楽とアートが教育に果たす大きな役割〕

現在英国で行われている事例について音楽・芸術教育の面から、ギルドホール音楽演劇学校とバービカンセンターの取組を中心に報告する。これらがすべて日本にあてはまるとは思わないが、何らかの参考にしていただければ光栄である。

英国で現在起こっている大きな変革は「パートナーシップ」にかかわるもの、すなわち、人や組織がそれぞれ持っているものを持ち寄って一緒に考え、行動を起こすことを重要視する考え方が浸透したことである。

英国ではこの2年ほどの間に音楽を中心とした芸術教育の見直しをおこない、その結果として、「さまざまなよい活動が行われているが、それらがすべて『点』であり、有機的につながっていない」ことが判明した。そして、それを解決するためのプランを練り（National Music Plan）、現在はそれに基づくアクションをスタートした時期である（ダンスなど他ジャンルについては現在見直しが進んでいる状況で、音楽が先行している）。

具体的な取組として「パートナーシップのハブ（結び場）を作ろう」というものがあるが、これは学校、芸術機関、大学、自治体などあらゆる組織がかかわり、「最高の音楽（聴くだけでなく創作も含む）」を伝えていこうというものである。若い人たちが音楽を学び芸術性を高め、たとえ芸術家にならないとしても音楽を学び経験することで自己理解を深め、人間的にも成長していくためにはどうしたらよいか、アーティスト自身は音楽・芸術に何をもたらすことができるか、ということがポイントとなっている。

言葉を換えて言えば、音楽や芸術に関する「成功」のイメージが変化・拡大したということである。旧来のアーティストとしてだけでなく、アンバサダー（橋渡し）としての役割、（既にそこにいる）聴衆のために演奏するだけではなく、これからの聴衆のために何をするか、何ができるか、などということが問われ、「参加型のアーティスト」の重要性が増している。今朝のワークショップのように、参加者と対等な立場でワークショップを行い、曲を作っていくスキルが求められており、英国内では、アーツカウンシルや政府内で、ワークショップ的なスキルを持った音楽家の認定資格について検討がなされはじめた。

私は、クロスアート（音楽・美術・ダンス・映画などさまざまなアートを網羅した）のセンターであるバービカンセンターとギルドホール音楽演劇学校の双方のクリエイティブ・ラーニング・ディレクターとして、人々に生涯学習の場を提供している。「芸術を実

践し学び合う」ということと「質を保つ」ということの両立を図り、芸術と教育を一体化させながら、これらの活動を通じて聴衆を育てている。

クリエイティブ・ラーニング（参加型ラーニング）の目的は人々がコミュニティを作ることだと考えるが、その価値と成果（インパクト）を測定するのはむずかしい。「試験で何点をとった」などの伝統的成果とは異なる形での評価手法（例：どれだけの人達とつながることができたか、どれだけ深い経験をしたか、能動的に参加したかなど）が必要となってくる。

○バービカンセンター/ギルドホールの活動例：

・ウィークエンドフェスティバル（参加型ワークショップのオープンキャンパス。ロンドンの街中のあちこちの通りでオーケストラ、音楽家、アーティストがさまざまな試みを行う）
・バービカンボックス（教師や学生が箱の中にある様々な小道具を使って新しい演劇を創り発表する。参加者はこの活動で得たイマジネーション、アイデア、エネルギーをそれぞれの場に持ち帰り今後に活かす）
・ギャラリーでの展示会（中国人アーティストが母の形見を展示→オーディエンスも自分たちの大切なものを物語と一緒に展示）
・ロンドンオリンピック関連で立ち上がったイベント（若い詩人が作った作品と映画、音楽のコラボレーション）

いずれも、異なった芸術分野や周辺組織とのリンク、パートナーシップで個々の強みが発揮されている。「パートナーシップ」とは、意味のある、人々とのつながりである。アーツ・リーダーシッププログラムの生みの親であるピーター・レンショウは、「人々がそれぞれのおかれている背景（コンテクスト）を理解することで、お互いがつながることができる。その都度、どのような背景の人が集まっているのか、相手をリスペクトする（敬意を払う）ことが大切である」と述べている。

我々の取組はまさに、「ビジョンの提示とそれに共感・共有し、皆がつながることで大きな変革が現実となる」こと（ある経済学者の言葉）のモデルケースとなろう。

２．湯浅真奈美：ブリティッシュ・カウンシル　アーツ部長

〔イギリスにおける最新事例の報告〕

ショーン・グレゴリー氏が、政策的な部分も含めて英国の現状について概観し、バービカンセンターやギルドホールの取組を紹介してくださった。私のほうでは、それ以外のアートや創造活動に関わる興味深い事例について紹介する。

○サウスバンクセンターの取組：芸術監督の強いリーダーシップのもと、「公の施設であるからこそ（一部の人達だけのものではなく）、皆が集まるような場所にする」というパブリックスペースに関するビジョンをアーティストと共有している。周辺の芸術機関（ナショナルシアター、ロイヤルフェスティバルホール、ロンドンフィルハーモニー）なども巻き込んだ夏のフェスティバルなどを実施。芸術で都市が良くなる、そのためには何をするとよいのかについて真剣に考えている。

○ストリートワイズオペラ：オペラという手法で、ホームレスと芸術家（演出や音楽にプロが入って作品を作る）のプロジェクトを実施。社会の下層部にあたる人達に対してアートが果たせる役割は何か考える（このプロジェクトは、2009年に日本に紹介され、大阪や横浜でも活動を行った）。

○サドラーズ・ウェルズ劇場のSum of Part：振付家やダンサーをはじめとしたアーティストと約150名の参加者がパフォーマンスを行った。大学などと協力し、参加者のコメントや関連のデータを言語化することで情報化し、「評価」についてのプロジェクトも実施した。これは異なる組織が信頼関係をもってパートナーシップを組んだ結果に他ならない。

３．茂木一司：群馬大学教育学部教授/特定非営利活動法人 ワークショップデザイナー推進機構理事

〔アートワークショップの現在～社会における役割〕

授業時間の減少という現実と情報メディア時代への対応の必要性から、美術教育について見直す中で「新しい表現の学び」としてワークショップに注目し研究を行ってきた。芸術や芸術教育は社会で役に立っているかどうかという問いかけに対して、新しい“芸術による教育”としてワークショップによる芸術教育を提案。

○アート（美術）ワークショップの広がりの事例紹介
・降旗千賀子「ワークショップ：日本の美術館における教育普及活動」
・藤浩志の「かえっこ」プロジェクト
・ヤノベケンジのアートプロジェクトと放射能
・とがびアートプロジェクト（中平千尋による中学校を美術館にするプロジェクト）
・旅するムサビプロジェクト（造形ファシリテーション能力獲得GP：武蔵野美術大学）
・障害児のためのメディアアートワークショップ（茂木一司：2003年～2011年）

○ワークショップデザイナー（WSD）育成事業
・ワークショップができる人、すなわちコミュニケーションの場づくりの専門家を育成

ワークショップは我々にとって「学校での学びをunlearnする（まなびほぐす）もの」である。多文化共生社会を実現するための他者理解と合意形成のエクササイズであり、（見えない部分ではつながっている）全体に配慮された総合的な学びとして定義される。

４．津上智実：神戸女学院大学教授

〔音楽コミュニケーション・リーダーの養成〕

３大学による共同プロジェクトは、2009年に文部科学省の補助金を受けスタートした。音楽系大学の学生が「専門力」のみならず「社会性」「コミュニケーション力」を磨き、自らの力で「人と人とを結ぶコミュニケーションとしての音楽の根源的な力」を地域社会や教育の場で活かすことができるよう、豊かな感性とリーダーシップを育むことを目的としている。文部科学省の補助金は昨年度（2011年度）で終了し、今年度は大和日英基金と日本音楽財団からの助成を受けて継続的に実施している。「研究」「教育」「実践」の３つの柱からなり、教育活動としては３大学をインターネット会議システムで結んだ「ミュージック・コミュニケーション講

座」やジュリアード音楽院卒業生やギルドホール音楽演劇学校からの指導者を招聘しての「夏期セミナー」を実施してきた。

３大学連携の背景として、神戸女学院大学では「音楽によるアウトリーチ」、東京音楽大学では「アクト・プロジェクト」、昭和音楽大学では「アーツ・イン・コミュニティ」という授業があり、各大学で実践的な活動を行っている。

ワークショップ・リーダーや音楽コミュニケーション・リーダーに求められるファシリテーターの役割として、「コミュニティへの奉仕」という姿勢がある。アーサー・ハルは『ドラム・サークル・スピリット』（1998年）という本で、「良いファシリテーターになるには、エゴをなくすことが必要」と説いている。この本には我々の目指すファシリテーターのあるべき姿が述べられている。

また、苅宿俊文氏（教育学）や茂木一司氏（美術教育）らとの交流で「ワークショップ」についても学術的に研究しはじめている。現在の音楽系大学には作曲や声楽、器楽などの専門的な音楽家の育成コースだけでなく、アートマネジメントや音楽療法、ジャズやポピュラーミュージックなど多くのコースがあるので、それぞれの特徴を生かしてリンクすることで音楽家の基礎教育を強化することが可能である。

ヨーロッパでは、このような交流がすでに始まっている（英国ギルドホール音楽演劇学校の“Reflective Conservatoire”が一例）が、日本でも大学の垣根を越えた情報交流を行うことで、より実のある教育ができるのではないだろうか。

＜パネルディスカッション／質疑応答＞

○パネリスト

ショーン・グレゴリー

〔バービカンセンター＆ギルドホール音楽演劇学校クリエイティブ・ラーニング・ディレクター〕

湯浅 真奈美

〔ブリティッシュ・カウンシル　アーツ部長〕

茂木 一司

〔群馬大学教育学部教授/特定非営利活動法人WSD推進機構理事〕

津上 智実

〔神戸女学院大学音楽学部教授〕

○モデレーター

武濤 京子

〔昭和音楽大学音楽学部教授〕

パネリストの方々からひとりずつ、他の方の報告を聞いての感想をうかがい、そのあと質疑応答に入る予定であったが、時間が足りなくなってしまったため、それを省略して質疑応答を行い、最後に各パネリストからひとことずつまとめたコメントをいただいた。グレゴリー氏から学生たちに対して、「学生たちは、自分に自信をもってこれからも学んでほしい。こういった活動をミュージシャン、アーティストとしての仕事の延長線（プロフェッショナルとしての機会）ととらえてほしい。」との言葉があった。

～来場者アンケートから～

・学校教育と、地域をつなげたワークショップを展開していくこと、それを“新しい役割”として捉えてお話されていたことが印象的でした。子どもたちの笑顔もよかった。
・ワークショップはまだまだ未開というか進行形の発展途上のものであること、だからこそ未来がある！！
・将来を担う学生の方々へ：多くの方が積極的に取り組まれることを期待します。
・学生の方の悩みを理解することができました。
・ワークショップなど教育のいろいろな試みを知ることが出来て良かった。学びほぐしを大学でできないか？
・「ワークショップ」のコンテンツがかなりカテゴリーとして確立されてきていること。後はやるだけだと思いました。
・音楽という面からのワークショップに接したのははじめてでしたが、アートや一般の大学教育とのつながりに思いをはせながら聞いていました。

平成 24 年度第 4 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 4 回ミュージック・コミュニケーション講座 「いまアーティストに求められるものとは ～社会の中でアーティストが果たすべき役割」
講　師	花田　和加子（ヴァイオリニスト）
実施日時	2012 年 10 月 3 日（水）18:30 ～ 20:00
実施場所	昭和音楽大学　南校舎 C511 階段教室
講座の概要	3 大学共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」の第 4 回では、ヴァイオリニストであり、かつコミュニティ・エンゲージメント・プログラムの開発やコーディネーターとして幅広く活躍している花田氏を迎え、活動を通して考えるアーティストの社会的役割について語っていただいた。 花田氏は、「なぜお客様はコンサートを聴きに行くのか」という質問を切り口として、お客様が求めるものを考慮してコンサートを提供するためには “3 つの要素 ”、すなわち 1）アーティストの演奏、2）プログラミング、3）演出、をいかに「面白く」するかが重要であると述べた。 また、コンサートのみならず、アウトリーチ活動においても、今後は「次のステップ」を見据え、相手のニーズと自分たちがやりたいことがマッチングできているかどうかを見直す必要があり、そのことが質の向上につながるとのお話があった。五嶋みどり氏のコミュニティ活動で、アシスタント経験も持つ花田氏は、五嶋氏が「アウトリーチ」という言葉自体が何かを「してあげる」意味合いがあるため、「コミュニティ・エンゲージメント・プログラム」と呼ぶ方が適していると述べたことに触れ、訪問先のニーズをしっかりと汲んだ上で、曲をいかに「面白く」聴かせるかが必要であると実感したとのことである。演奏、マネジメント、ヴァイオリン指導、さらには公共ホールの事業にも携わる中で、音楽をする意味を複眼的に思考する花田氏の講義は、学生にとって新たな視点を得る貴重な機会となった。

〈学生のことば〉

・コンサートはどんなに演奏が素晴らしくても、宣伝や広告をしないとお客様が集まらず成り立たないので、そのコンサートの演出やどういった工夫をしてきたのかといった生のお話を聞くことが出来て、とても興味深い内容ばかりでした。

（東京／声楽／1年）

・今後、自分がどう音楽に関わっていくか迷っていた所でしたが、今回の講座で関わり方にも本当に様々な方法があるんだなと感じました。もっと広い視野で、音楽に関わっていきたいと思います。

（東京／ピアノ／3年）

・コンサートへわざわざお客様が来る理由ということを今まであまり考えたことがなかった。今日改めて考えると、お客様にお金を払って来ていただく以上は、よりよい音楽を提供するだけでなく、選曲や演出にもこだわって一つのコンサートを作らなければいけないのだなと感じた。楽器を通じることによって子どもたちの成長を見ることができるだけでなく、自分自身も成長できるという話には非常に感動した。

（昭和／サクソフォーン／1年）

・プログラミングのお話は、とても勉強になりました。コンサートの企画制作をするにあたって「ターゲット」「目的」「長さ」

「演出」ということを、これからに活かしていきたいです。
（昭和／アートマネジメント／1年）

・自分がどうして舞踊にひかれて、大学でも専攻で学びたいと思ったかというのは、しっかりと自分の中にあるつもりでいますが、その思いをどうやって他人に伝えて、なおかつ同じ様な思いで舞踊の道に進みたいと思わせられるかというのは考えたことがなかった。今回の講座では、コンサートに興味をもってもらうためにどのような工夫をしているかなど、多くを話されていたが、お話を聞きながら、ただ舞台をやるのではなく、入場料に見合った特別な気分を味わってもらうだけでもなく、自分のことを知ってもらう、見てくれた人が自分もぜひ体験したい、踊りたいと思ってくれるような舞台を創りたいと思った。
（神戸／舞踊／1年）

・今後のアウトリーチ実習の際に活かしていきたいです。そして、自分の活動にはもちろん、共に活動する同志にも今日のことを全部伝えていくことが私の役目だと感じています。（神戸／ピアノ／4年）

・アウトリーチ活動やクラシックの演奏会をする時にもターゲット（お客さん）のことをよく知ること、テーマ性や目的をしっかり持つこと、有効な演出などを工夫することを実践したいです。
（神戸／トロンボーン／4年）

※写真は昭和音楽大学の様子です。

平成 24 年度第 5 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 5 回ミュージック・コミュニケーション講座 「音楽とコミュニケーション～音楽を伝えるということ～」
講　師	高橋　多佳子（ピアニスト）
実施日時	2012 年 12 月 5 日（水）18:30 ～ 20:00
実施場所	昭和音楽大学　南校舎 C511 階段教室
講座の概要	3 大学共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」の 2012 年度最終回となる第 5 回は、ピアニストの高橋多佳子氏を迎え、ご講義いただいた。 講義の内容は、幅広く活動する高橋氏ならではの豊富な経験にもとづくものであり、（1）プロのピアニストになるまで、（2）様々なコンサートの実践例、（3）(1)(2) を踏まえ、ピアニストとして心がけていること、の大きく 3 つの柱で進められた。（1）では、ショパンコンクールでの入賞を機に、ピアニストとしてのキャリアをスタートさせるまでのエピソードが語られ、プロとなった当初から実践しているというトーク付きコンサートが「エチュード『革命』」の生演奏で披露された。（2）では、自身が出演した「小学校へのアウトリーチ」、「のだめコンサート」、「東日本大震災チャリティーコンサート」等数々のコンサートの写真と説明を交え、お客様に音楽を伝えるには様々な方法、すなわち各公演のコンセプトに適した構成、解説、照明、映像の使用、その他の演出が重要な役割を果たし、お客様とのふれあいを生み出していることが実例で示された。そのうえで（3）では、ピアニストとして関わる仕事は単に「ピアノを弾く」だけではなく、打ち合わせやメールのやりとり、原稿の執筆、さらには現場のスタッフと良い関係を築き、広い人脈を持つことまで求められ、こうした日々の努力を積み重ねていることを述べるとともに、仕事をしていく中で一番大切なことは前向きな気持ちで音楽を続けていくことであるとのことであった。音楽を伝えるための様々な工夫の背後に、作品への深い理解が必要であるとともに、日々の心がけや多くの人との関わりがあることを知ることができ、学生にとっても今後の意欲を高めるきっかけとなった様子がうかがわれた。

〈学生のことば〉

・コンサートを開く際に、お客様をどのように曲の中に引き込んでいけば良いのか、色々教えて頂くことができ、是非参考にしたいと思った。特に曲目解説はものすごく大切であり、どれだけお客様を楽しませたり、充実したコンサートにするのかは奏者の言葉や文字（曲目解説）でもかなり変わるということを学ぶことができた。今後も色々な場面で演奏する機会があるので、今回教えて頂いたことも活かしてより良い演奏会にしていきたいと思った。

（昭和／打楽器／3年）

・演奏会での間のトークをする時に、コミュニケーション能力が必要だというのはもちろん、楽曲についての知識をもっと深めていかなくてはならないと思います。曲を説明する大切さがわかりました。

（昭和／アートマネジメント／1年）

・海外で実績を残して、そこからのつながりや、何事にも積極的に自ら挑戦していくことの大切さを学んだ。また、演奏前に曲の背景、内容を少しでも提示しておくことで、お客さまの興味をひくことができることもわかった。　（昭和／打楽器／2年）

・先生の明るく楽しく、分かりやすいお話で時間がとても短く感じられるほどためになる講座でした。ショパンコンクールや様々な類のコンサートに出演されている先生ならではの貴重なお話を聞くことが出来ました。　（東京／作曲（映画放送）／1年）

・ショパンの「革命」に対する知識を得たうえで、革命を聴いた時の感動は想像以上でした。今まで聴き逃していた楽曲のバックグラウンドをよく調べてみようと思った次第です。また、高橋先生のありのままの姿での話だったので、緊張もせず、肩の力を抜いて楽に聞くことが出来ました。本当にありがとうございました。
（東京／ソングライティング／1年）

・ビジネス面でのことはメールの事など、反省する点があったので改善していこうと思いました。先生の明るさが演奏活動に生きているなと思いました。
（東京／フルート／3年）

・高橋先生が実際に出演されたコンサートについて具体的にたくさんお話いただき、ピアニストがどんな生活を送っているのかイメージがつかめたような気がしました。こんなにも色々な場所で、様々な企画・内容のコンサートをされていることに驚きました。でも、これだけ活躍されているのは演奏の素晴らしさはもちろんですが、演奏以外の部分、お客さんのニーズを考えた企画や工夫された演出をしたり、人とのつながりを大切にしたり、そのような部分の努力も大きいのだと感じました。
（神戸／トロンボーン／4年）

・体育館で、多人数の前で弾いた時は、質問コーナーを作ってわざわざ遠くの席の子に聞いてみたりとか、少人数の時は、ピアノの周りに全員を集めてピアノの鍵盤を見せてやってみたりだとか、細かい工夫ですがとても使える、役に立つお話だなと思いました。　（神戸／打楽器／１年）

・高橋先生がこれまでのキャリアを積んでこられたのは、人との出会いやつながりがキーポイントだったというお話が今の私にとって一番大切なことだと思いました。音楽を続けていくなら、演奏の機会を作りたいなら、人とのつながりを大切にしていこうと思います。のだめコンサートのリアルタイムの曲名解説や、高橋先生が行ったプレコンサートという企画がとてもおもしろそうなのでやってみたいと思いました。
（神戸／トロンボーン／4年）

※写真は昭和音楽大学の様子です。

平成 24 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」教育効果測定

1．平成24年度「ミュージック・コミュニケーション講座」の概要と教育効果測定

3年目を迎えた平成24年度の「ミュージック・コミュニケーション講座」（以下、MC講座）は、インターネット・ビデオ会議システム（IV会議システム）を通じ、３大学間で同時配信・同時受講する授業を年間計5回（1回90分）と、３大学の学生が合同で参加する夏期セミナーを4日間にわたり実施した。

昨年度に続き、本年度の講座もワークショップの理論と実践を取り入れ、夏期セミナーでは英国より講師を招聘して「クリエイティブ・ワークショップ」を体験した[1]。また、学生の側からも、授業外の時間に学生同士で議論する時間を設ける等、主体的に学ぶ意欲の高まりが見られた。

上記のようなMC講座について、平成24年度の教育効果測定を実施した。本稿では、その調査の概要及び結果を報告する。

2．調査方法

調査は、①MC講座受講前（第1回講座開始前）及び講座受講後（第5回講座終了時）に実施される「履修者調査シート」による調査と、②夏期セミナー終了時の受講生に対するアンケート調査並びに３大学教員に対するコメントシートによる調査、の2つを基本的な枠組みとしている。調査対象期間は、平成24年度のMC講座（オリエンテーション2012年5月9日～第5回12月5日）及び３大学合同夏期セミナー（2012年8月29日～9月1日）である。また、調査対象者は、東京音楽大学、神戸女学院大学音楽学部、昭和音楽大学の受講生である。

3．「履修者調査シート」回答者の内訳

上記①の調査では、講座に出席した履修者及び履修者以外の受講生（聴講等）に対し「履修者調査シート」を配布し、回答を得た。回答者の内訳は表1・表2の通りとなった。

また、本講座は、地域社会における音楽活動の広がりを意識している点で、３大学で既設の地域音楽活動関連科目[2]と内容に関連性がある。そのため、本講座参加者のうち、地域音楽活動関連科目の参加者を調査したところ、内訳は表3の通りとなった。

表 1　　平成 24 年度講座開始前調査回答者の内訳

	履修				専攻			学年					計
	履修者		非履修者		A群	B群	C群	1年	2年	3年	4年	院･短大	
	Ⅰ	Ⅱ	初めて	継続									
東京	11	0	0	0	11	0	0	7	2	2	0	0	11
神戸	4	0	1	3	7	0	1	2	0	3	3	0	8
昭和	11	0	1	2	9	5	0	12	2	0	0	0	14
合計	26	0	2	5	27	5	1	21	4	5	3	0	33

※ A 群は、器楽、声楽、作曲、ポピュラー音楽専攻。B 群は、音楽学、音楽教育、アートマネジメント、舞台スタッフ、音楽療法専攻。C 群は、舞踊専攻。

1　第 1 回から第 5 回の MC 講座及び夏期セミナーの詳細については、４頁～ 21 頁を参照。

2　地域音楽活動（アウトリーチ活動等）やコンサートの企画・運営等を体験し修得するプログラムで、3 大学各校で内容は異なるが､いずれも授業科目となっている。プログラム名は､東京音楽大学「アクト･プロジェクト」､神戸女学院大学音楽学部「音楽によるアウトリーチ」､昭和音楽大学「アーツ・イン・コミュニティ」である。

表２　平成 24 年度講座終了時調査回答者の内訳

	履修				専攻			学年					計
	履修者		非履修者		A群	B群	C群	1年	2年	3年	4年	院･短大	
	Ⅰ	Ⅱ	初めて	継続									
東京	3	1	0	1	5	0	0	2	2	1	0	0	5
神戸	4	0	1	5	9	0	1	2	0	5	3	0	10
昭和	8	0	0	1	7	2	0	8	1	0	0	0	9
合計	15	1	1	7	21	2	1	12	3	6	3	0	24

表３　平成 24 年度講座終了時における地域音楽活動関連科目参加者

東京音楽大学	講座終了時５人中、「アクト・プロジェクト」のメンバー１人
神戸女学院大学音楽学部	講座終了時 10 人中、「音楽によるアウトリーチ」履修８人
昭和音楽大学	講座終了時９人中、「アーツ・イン・コミュニティ」参加４人

4．MC講座受講生の期待と成果

4-1．MC講座受講前後の「履修者調査シート」における設問Ⅰの結果

講座開始前の設問Ⅰでは、「履修のきっかけ」を問うことでMC講座に対する期待を、また、講座終了時の設問Ⅰでは、MC講座で得た成果を、選択肢の中から複数回答可として質問した。講座開始前については図1から図3に、講座終了時については図4から図6に、その結果を示す。

過去2年間の調査と同様、3つの大学でそれぞれ回答者の割合が異なる点が注目される。このことは、各大学の学生にとって、本講座の持つ意味合いが必ずしも同じではないと考えられ、今後の本講座の内容の検討においても参考となる結果が得られた。

〈講座開始前・設問Ⅰ〉

あなたがミュージック・コミュニケーション講座を履修しようと思ったきっかけは何ですか？

図１　東京音楽大学受講生の回答
n=11、MA（%）

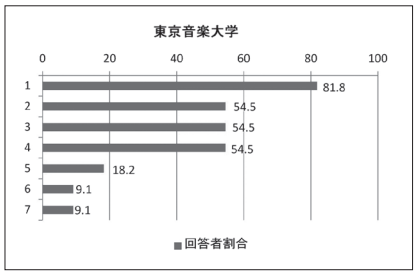


図２　神戸女学院大学受講生の回答
n=8、MA（%）

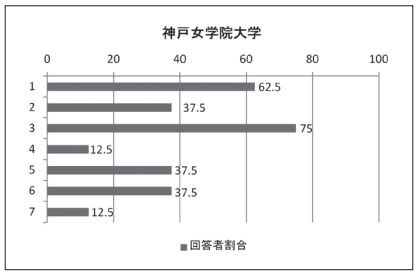
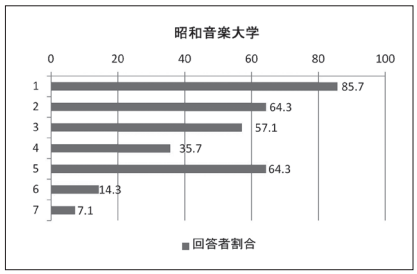


図３　昭和音楽大学受講生の回答
n=14、MA（%）



〈設問Ⅰ　選択肢（複数回答可）〉
1．音楽を通していろいろな人とコミュニケーションする能力を高めたいと思ったから。
2．将来、仕事をするときに役立ちそうだから。
3．音楽に関して幅広く知識を得たいから。
4．授業の形態（IV会議システムによる３大学同時受講）に興味を持ったから。
5．他の大学の学生と交流したいから。
6．昨年も受講して、継続的に学びたいと思ったから。
7．その他（自由記述）

〈講座終了時・設問Ⅰ〉
あなたがミュージック・コミュニケーション講座で得た成果は何ですか？

図４　東京音楽大学受講生の回答
n＝5、MA（%）

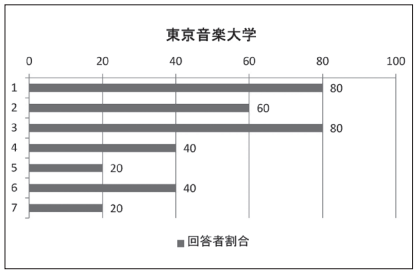


図５　神戸女学院大学受講生の回答
n＝10、MA（%）

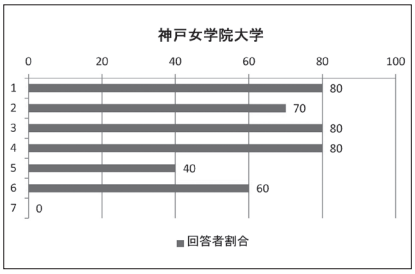
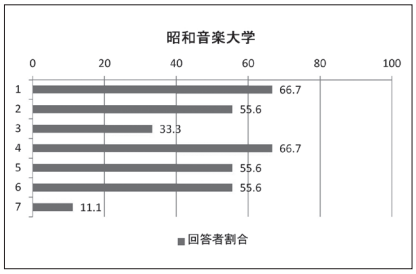


図６　昭和音楽大学受講生の回答
n＝9、MA（%）



〈設問Ⅰ　選択肢（複数回答可）〉
1．音楽を通して広くいろいろな人とコミュニケーションする能力が高まった。
2．将来、音楽に関わる仕事をするために役立った。
3．音楽を取り巻く社会の現状など、幅広い知識を得ることができた。
4．人と人とのコミュニケーションやリーダーシップについて学ぶことができた。
5．インターネット・ビデオ会議システムによる３大学同時受講で講義が一層有意義なものになった。
6．他の大学の学生と交流することができた。
7．その他（自由記述）

4-2．３大学合同夏期セミナーにおける調査結果

夏期セミナー終了後、受講生に対しアンケート調査を実施するとともに、３大学教員からもコメントシートによる回答を得た。以下にその結果をまとめる。なお、受講生には一般参加者3名を含む。

表５　平成 24 年度夏期セミナーアンケート回答者の内訳

	参加者		専攻			学年					計
	履修者	その他	A群	B群	C群	1年	2年	3年	4年	院･短大	
東京	3	3	6	0	0	1	3	1	1	0	6
神戸	4	4	7	0	1	2	0	4	2	0	8
昭和	6	2	6	2	0	7	1	0	0	0	8
一般		3									3
合計	13	12	19	2	1	10	4	5	3	0	25

※ A 群は、器楽、声楽、作曲、ポピュラー音楽専攻。B 群は、音楽学、音楽教育、アートマネジメント、舞台スタッフ、音楽療法専攻。C 群は、舞踊専攻。

4-2-1．受講生に対するアンケート調査

受講生に対するアンケート調査では、①自分自身の取組についての評価、②グループとしての取組についての評価、③セミナーによる自分の考えの変化や気づき、の3つの観点から質問をした。③については記述回答とし、別途報告書[3]に記載している。

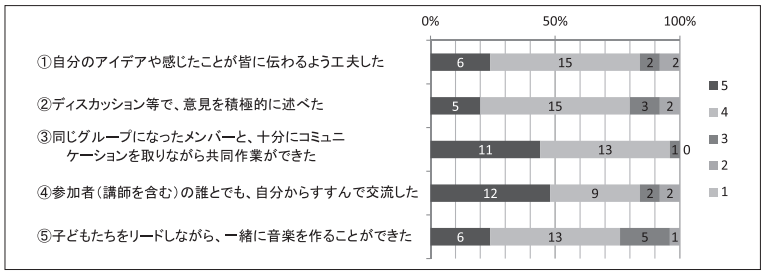
調査結果から、共同作業への参加や交流については高く評価しているが、自分の意見を述べることについては、思ったよりも容易くなかった様子がうかがわれる。

3　夏期セミナーに参加した学生のコメントは 10 頁～ 11 頁を参照のこと。

①自分自身の取組についての評価

図７　夏期セミナー自己評価（３大学全体）
質問：セミナーにおいて、あなた自身の取り組みはいかがでしたか。（5 段階で当てはまる数字を回答）

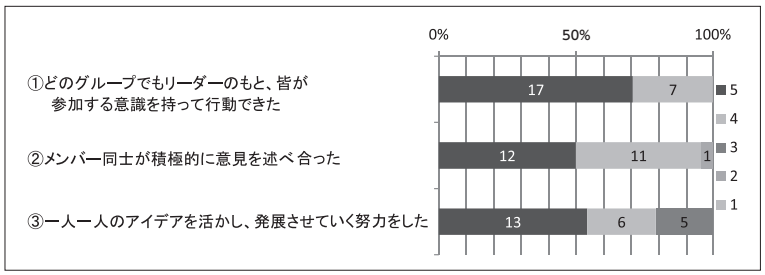
〔グラフ内、単位（人）〕n=25



②グループとしての取組についての評価

図８　夏期セミナーグループ評価（３大学全体）
質問：３日間で、あなたが加わったグループの取り組みはいかがでしたか。（5 段階で当てはまる数字を回答）

〔グラフ内、単位（人）〕n=24



4-2-2. 教員からのコメント

教員[4]によるコメントシートでは、夏期セミナーにおける指標として①自己表現力、②言語化・思考能力、③協調性、④積極性・行動力、⑤子どもとのコミュニケーション能力の5つの項目についてコメントを求めた。ここでは、コメントの概要を記述する。

まず、①自己表現力については「今まで夏期セミナーやＷＳの経験がある学生とそうでない学生との間に明瞭な違いが見られた」とのコメントがあった。しかし、経験による違いはあるものの、「単語や擬音レヴェルから、即興演奏に至るまでのあらゆるスペクトラムを許容するクリエイティブ・ワークショップの懐の深さに支えられて、日を重ねるに従って学生たちも次第にのびのびと振る舞うようになっていった」とされる。

②言語化・思考能力については、「小学生を迎えた後には積極性がきわだって高まり、シンポジウムや総括ディスカッションでも質問が次々に出たことは大きな成果」であり、「初日からやってきた各プロセスの意味と重要性を明確に認識して言語化していた」とされる。

③協調性については、「昨年の夏期セミナーに参加した学生と、今年初めて参加した学生とでは、共同作業の取り組み姿勢に差が見られることが多かったが、2日目あたりから学校の違いを超えてグループ内で活発に話ができるようになり、最終日にはよいチームワークができるようになった」とされる。

④積極性・行動力については、昨年も参加した学生は初日に自分から挨拶に行く等、積極性が見られた模様である。しかし、全体としてこの点については個人差が大きく、「誰にでも気楽に声を掛けられるタイプの学生と、控え目な性格の学生とでは、行動にかなりの開きがあった」とされる。

4　コメントシートの回答は、３大学教員より提出された。

⑤子どもとのコミュニケーション能力については、「今年度は子どもたちとの交流を2日間持つことができたのも大きく貢献した」というコメントがあった。すなわち2日目は、「前日の経験もあり、音楽もある程度できていたので、自由創作の部分を丁寧にすることができた。コミュニケーション力を発揮するには、それ以外のお膳立ても重要であることを感じた」とのことである。

学生による自己評価と、教員からのコメントを総合すれば、昨年度に続いて参加するなど一定の経験を持つ学生は、セミナーの初めから積極的に行動することができた様子である。一方、初めて体験する学生でも日を重ねるごとに、幅広い表現方法が許容されるワークショップの特性に慣れ、解きほぐされていったと言える。また、小学生をリードすることにより、発言することに対しても前向きな姿勢に変わっていった模様である。

5. MC講座受講生の意識・意欲の変化

次に、MC講座受講前後の「履修者調査シート」における設問Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの結果から、受講生の意識や意欲の変化を見ることとしたい。

5-1. MC講座受講前後の「履修者調査シート」における設問Ⅱの結果

設問Ⅱでは、将来の活動の希望について、①音楽家②スタッフとして音楽に携わる③音楽指導者④まだわからない、の4つの選択肢で質問した。受講前後で対象者を同じくして比較するため、履修生に限定して集計を行った（表6・表7参照）。

開始前と終了時の調査結果を比較すると、特に「3. 音楽指導者として活動をしたい」と回答した割合が、開始前11.5％から終了時20.0％へと増加している。このことは、先に述べた夏期セミナーでの経験を含め、子どもを対象にしたワークショップへの参加が、一定程度学生の意識に影響したものと考えられる。

〈設問Ⅱ〉あなたは将来、主にどのような活動をしたいですか？

表６　講座開始前（３大学履修生合計）　n=26

	度数(人)	割合(%)※	A群(人)	B群(人)	C群(人)
1．音楽家（演奏家や作曲家）として音楽活動をしたい。	11	42.3	11	0	0
2．スタッフとして音楽に携わる仕事をしたい。	5	19.2	1	3	1
3．音楽指導者として活動をしたい。	3	11.5	3	0	0
4．まだわからない。	5	19.2	5	0	0
1・3（複数選択）	2	7.7	1	1	0

※割合は、小数点第二位以下を四捨五入。

表７　講座終了時（３大学履修生合計）　n=15

	度数(人)	割合(%)※	A群(人)	B群(人)	C群(人)
1. 音楽家（演奏家や作曲家）として音楽活動をしたい。	4	26.7	4	0	0
2. スタッフとして音楽に携わる仕事をしたい	3	20.0	0	2	1
3. 音楽指導者として活動をしたい	3	20.0	3	0	0
4. まだわからない	2	13.3	2	0	0
1・3（複数選択）	1	6.7	1	0	0
1・4（複数選択）	1	6.7	1	0	0
1・2・3（複数選択）	1	6.7	1	0	0

※割合は、小数点第二位以下を四捨五入。

5-2. MC講座受講前後の「履修者調査シート」における設問Ⅲの結果

設問Ⅲでは、自由記述により、「音楽活動をするためには、どのようなコミュニケーション能力が必要だと思うか」を質問した。

講座開始時に比べ、終了時は、相手の考えや気持ちを理解し、相手を受け入れる必要性を述べる回答が多くなっている（表8、9を参照）。このことから、より深く相手を理解しようとする姿勢へと、学生の変化を見ることができる。

〈設問Ⅲ〉音楽活動をするためには、どのようなコミュニケーション能力が必要だと思いますか？

表８　講座開始前（３大学全体）

主な記述	件数	備考
自身が考えていることを上手に伝える能力と、相手の考えを汲み取ろうとする能力	9	昭和・神戸・東京
周りの人と協力できる	3	昭和
人脈をつくる能力	2	昭和
相手のニーズを知る	2	昭和・神戸
あらゆる方面、方法での情報発信	1	昭和
様々な人に分かりやすいコミュニケーション	1	昭和
積極的に自分から話せる	1	昭和
幅広い世代の人々とのコミュニケーション能力をはじめ、音楽の専門知識もそうでない知識（一般教養など）も身に付けていること。	1	東京
具体的でない要求も自分なりに解釈する能力	1	東京
ＭＣ能力（対お客様）、交渉能力（対企画をするときの商談相手）	1	東京
音楽だけでなく経済的な分野も議論できる能力	1	東京
１つの点について、多数方向から物事を考えて追求していく能力	1	東京
音楽の内容を高めるためには、言葉や表情などで“伝える力”をしっかり持ちたい。	1	東京
音楽を創りあげるには協力する力が絶対に必要だと思うし、指導者ならば生徒と信頼関係を築く能力も必要だと思う。	1	東京

表９　講座終了時（３大学全体）

主な記述	件数	備考
自分の思いを相手の気持ちを考えて伝える能力	4	昭和・神戸
相手のことを理解して受け入れる能力	4	神戸・東京
人との出会いを大切にし、積極的に接する	3	昭和・神戸
どんな時でも臨機応変に対応する能力	2	昭和・神戸
相手の話を聞き、また自分の考えも述べ、意見交換ができる能力	1	昭和
色々な人たちと情報交換をしたり、協力していく能力	1	昭和
発信力（積極的な気持ち）と受信力（求められているものを感じ取る）の両方が大切。自分の世界を広げて飛び出すこと。	1	昭和
自分の個性（弱みも強みも）を知っていること。考えてまとめて伝えられること。	1	昭和
相手（お客様）が何を求めているか考えられる力	1	神戸
企画を提案できる力	1	神戸
失敗をおそれずに意見を伝える勇気。芯のある意見を持ち、どんどん人と話していく社交性。	1	神戸
自分の専門だけに偏ってしまわない視野と、色々なことへ対応する力が大切	1	東京
わかりやすく伝える力。よりよく相手の意図を理解する力	1	東京
相手の思っていることを十分に読み込み、受け入れ、様々なバランスを取りながら進めていく力	1	東京

5-3. MC講座受講前後の「履修者調査シート」における設問Ⅳの結果

設問Ⅳでは、「音楽コミュニケーション・リーダー」の指標として、「専門力」「社会性」「コミュニケーション能力」の3つの観点に基づく15の項目を設定し、これらについて「非常にあてはまる」を5、「全くあてはまらない」を1とする5段階評価で質問した。受講前後で対象者を同じくして比較するため、履修生に限定して集計を行った（表10・表11参照）。

開始前と終了時の数値を比較すると、以下の8項目で0.1ポイント以上の増加が見られた。

1．ホールだけではなく、いろいろな場所で演奏や音楽活動をしたい
7．音楽に関連する様々な職業に興味がある
9．インターネットや新聞等で情報を集め、社会の動きに関心を持っている
10. 地域の学校の子どもや、演奏会に足を運べない人に音楽を届ける活動を積極的にやりたい
11. 広く多くの人と、コミュニケーションすることが好きである
12. 自分の意見をわかりやすく述べるよう工夫している
14. 周りの人と協力して物事に取り組むことができる
15. チームの仲間を導き、まとめることができる

一方で、下記の項目については、0.1ポイント以上の減少となっている。
6．自分の専攻以外の楽器や、学科にも興味がある

この結果によれば、0.1ポイント以上増加した項目は、「社会性」「コミュニケーション能力」に関する項目が多く、意欲が高まったことが示されている。また、0.1ポイント以上減少した項目については、本講座の趣旨、取組内容に照らせば、様々な専攻の学生が混ざり合うことが前提となっているため、あえて意識しなくなったと考えることもできる。いずれにせよ、結果を踏まえ、今後詳細に検討する必要があろう。

〈設問Ⅳ〉

表 10　講座開始前（3 大学履修生合計）　n=27

設問番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
5	13	11	13	8	12	17	12	19	3	6	10	8	12	8	2
4	12	7	10	15	10	9	10	4	8	15	6	5	14	14	9
3	1	7	4	3	4	1	5	3	8	5	9	9	1	4	11
2	1	2	0	1	1	0	0	1	7	1	2	5	0	1	4
1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
数値平均	4.37	4.00	4.33	4.11	4.22	4.59	4.26	4.52	3.19	3.96	3.89	3.59	4.41	4.07	3.26

※数値平均は、小数点第二位以下を四捨五入。

表 11　講座終了時（3 大学履修生合計）　n=15

設問番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
5	11	5	8	6	6	7	8	11	2	6	4	4	7	6	4
4	4	6	4	5	6	8	6	2	4	6	8	3	7	6	3
3	0	3	3	4	3	0	1	2	8	3	3	8	1	3	5
2	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
数値平均	4.73	4.00	4.33	4.13	4.2	4.47	4.47	4.6	3.47	4.2	4.01	3.73	4.4	4.2	3.53

※数値平均は、小数点第二位以下を四捨五入。講座開始前よりも 0.1 ポイント以上の変動があったものに網掛け。

6．まとめ ― 平成24年度MC講座の教育効果

以上に述べてきた調査結果を今一度整理すると、まず、本年度の受講者は昨年度までと同様、幅広い学年と専攻の学生の混合となっている。その中で、非履修者だが昨年度から継続して受講している学生が一定数含まれている。夏期セミナーでは、こうした継続受講の学生が積極的な姿勢を見せており、ワークショップの場づくりに貢献したものと見られる。

受講後の意識・意欲の変化を見ると、社会性やコミュニケーション能力に前向きな変化が表れている。これは、講座やワークショップ体験による啓発が一定の役割を果たしたものと考えられる。また、ワークショップにおけるリーダーシップ体験が、設問Ⅱの結果に見られるように、将来の活動として音楽指導者を視野に入れる学生の増加にもつながったと推測される。

これらの結果に表れた本講座の効果を踏まえつつ、今後は、各大学の学生のニーズをきめ細かに把握していくことが必要となるであろう。

本報告の終わりに、MC 講座を受講した学生の感想を次頁に掲載する。

（佐藤　良子）

「ミュージック・コミュニケーション講座」を受講しての感想（自由記述）

・夏期セミナーで、やっぱり受講して良かった！と思いました。音楽的なものを使って初めて会った人と心が通じる瞬間の嬉しさは何ものにも代えられないものでした。この講座には自分の世界・視野を広げるチャンスをもらえました。（昭和／ピアノ／1年）

・音楽コミュニケーション講座を受講して、音楽とはコミュニケーションツールの原点であるということを再確認することが出来たし、自分にとって音楽というものがどれだけ大きな存在であるのか痛感することができました。この経験を1年生のうちに得ることができて本当に良かったです。（昭和／アートマネジメント／1年）

・自分の専攻以外の専攻の話や他大学の話を多く聞く機会に恵まれたのがとてもよかったと思う。リーダーとして活動することについてこの講座で怖さがなくなったので、もっと積極的に活動に関われたら良いと思いました。（神戸／舞踊／1年）

・即興やダンス講座では、自分を解放することができてすがすがしかった。また、いろいろ体験を聞くことによって視野が広がりました。もっと自分を出して、いろんなことに挑戦したいと背中を押してくれる講座でした。（神戸／声楽／3年）

・夏期セミナーでは今まで画面越しで名前も知らなかった人たちと、それまででは信じられないほど打ち解けて仲良くなり、視野もとても広がり、忘れられないものになった。ギルドホールの先生方とは英語でコミュニケーションがとれたり、実際に子どもたちと一緒に音楽を“創”っていけたことが貴重な経験になった。（東京／作曲（映画・放送）／1年）

・今まで、漠然としていた音楽と地域の関わり方や、「演奏する」以外に何が出来るのか、5回の講座を受講して詳しく考えることができました。ワークショップでリーダーについて考えるきっかけになりましたし、これからの音楽家とお客様の関係を考える上でとても貴重な経験でした。（東京／ヴィオラ／2年）

「音楽ワークショップ集中研修」ならびに「子どものための音楽作りワークショップ」

事業の名称	平成 24 年度３大学連携事業 「音楽ワークショップ集中研修」ならびに「子どものための音楽作りワークショップ」
音楽作り指導役	タラ・フランクス（チェロ／英国） イシュマエル・アフラ・サッキー（打楽器、ダンス、歌、作曲／ガーナ） 東　瑛子（ヴァイオリン／日本）
RTV による指導	曽和　具之（神戸芸術工科大学准教授）（RTV = Real Time Video）
企画・司会	津上　智実（神戸女学院大学音楽学部教授）
実施日時・期間	2012年10月16日（火）～ 18日（木）18:20 ～ 19:50、19日（金）17:15 ～ 20:15 20日（土）10:00 ～ 17:00 ※子どものための音楽作りワークショップは最終日のみ
実　施　場　所	神戸女学院大学音楽学部オルチン館、および音楽館
主催／協力など	主催：神戸女学院大学音楽学部 協力：英国ロンドン市ギルドホール音楽演劇学校、東京音楽大学、昭和音楽大学 助成：大和日英基金、日本音楽財団、グレイトブリテン・ササカワ財団
参加者数	16 日～ 19 日：神戸女学院生 34 名（1 年生 7 名、2 年生 6 名、3 年生 14 名、4 年生 7 名） 20 日：神戸女学院生 27 名（1 年生 6 名、2 年生 6 名、3 年生 11 名、4 年生 4 名）、子ども 39 名
事業の概要	本事業は、３大学（東京音楽大学、昭和音楽大学、神戸女学院大学音楽学部）連携の一環として、英国ギルドホール音楽演劇学校との交換学生として企画されたものである。 本事業の目的は、人間に備わる音楽的な創造性についての認識を高め、個々人の内に眠る音楽的なアイディアを引き出して、互いの声を聞き合うことによって、有意義な構築物へと組み上げるための音楽的なリーダーシップのスキルを学ぶことである。同時に、日英の若者が互いの文化やその社会的背景を学び合うことをめざしている。 そのため、まず 2012 年 10 月 15 日からの一週間、英国ギルドホール音楽演劇学校リーダーシップ修士の２名（タラ・フランクス、イシュマエル・アフラ・サッキー）が来日し、同修士で本学アウトリーチ要員の東瑛子を加えた３名が指導役を務める形で、音楽学部生を対象とするクリエイティブ・コラボラティブ・ワークショップ（CC ワークショップ）集中研修を実施した。 その間、10 月 16 日（火）から 19 日（金）までの４日間は学生対象の研修を計５コマ、最終日の 10 月 20 日（土）には、学生の学びの仕上げの場として、子どもたちを交えた形で、第３回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」を実施した。後者は、本学アウトリーチ・センターが定期開催している「子どものためのコンサート・シリーズ」の関連事業として実施し、参加する子どもの募集や当日の来場者の対応等はアウトリーチ・センターのスタッフが行なった。 CC ワークショップでは、毎回、全員で１つの大きな輪になり、身体をほぐしたり、手拍子や息の音

を隣の人に回したりするアイスブレイクから開始された。

次に、ボディ・パーカッションでリズムを叩き、そこに各自のオリジナルのリズムを乗せたり、３～４グループに分けて、グループ毎に異なるリズムを叩き、それを重ねたり入れ替えたりする活動を行った。また、「No one can guess, nobody knows, where the wind comes from, where the wind goes」という短い英語の歌（「風の歌」）を習い覚え、指導役の指示でグループに分かれて輪唱したり、対旋律をつけたりした。アフラの音頭で、ブギ・ダンスの練習も行なった。

毎時間の後半は、グループによる音楽作りを行なった。歌や楽器（各自の専攻楽器や小物打楽器など）を手に４グループに分かれ（歌／パーカッション／旋律楽器群／ベース楽器群）、前半に全員で共有した短いリズムと歌を基に、メンバーでアイディアを出し合いながら自分たちの音楽を作っていった。その後、できた曲を全員の前で順に発表して聞き合った上で、様々に組み合わせることで音楽的に発展させて、一繋がりの作品へと組み上げていった。皆が一定のベース音を刻む中、学生が１人ずつ順に短いフレーズを即興演奏する場面もあった。

最終日には、小学校３年生から６年生までの子ども39名を交えて、第３回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」を行なった。ここでは、前日までの研修でリーダーシップのあり方を学んだ学生たちが、実際に子どもたちをリードする役割を担った。ヴァイオリン、ピアニカ、鉄琴などの各自持ち寄った楽器を手に、子どもたちも音楽作りに参加した。学生は、子どもからなかなか意見が出なかったり、逆に特定の子どもが集中的に意見を出したりして、グループ活動の運営に苦労する場面もあったが、それぞれに工夫しながら次第に曲として形を成していくにしたがって、笑顔が増えていった。休憩時間も学生と子どもがグループ毎に昼食を取り、一緒に遊ぶ姿や、熱心に練習を続けるグループの姿も見られた。

午後からは、各グループの成果を発表しあった後、それらを組み合わせて、発展させていった。アフラの音頭で、ブギ・ダンスの練習も全員で行なった。

最後の30分間は、保護者を観客として、一日の成果発表を行なった。タラ、アフラ、瑛子を全体リーダーとしながら、各グループのリーダーは代表の学生が務め、他の学生も隣にいる子どものリードを積極的に行った。「風の歌」の旋律をモチーフに、各グループが作った音楽を組合せることで、20分余りの作品へと発展した。続いて、指導役の奏する打楽器のリズムに乗って、子どもと学生がブギ・ダンスを踊った。前半は全員で同じ振りを踊ったが、後半は学生のリードに従い、グループごとに自分たちで考えて作った声や身体の動きを披露し、さらにそれらを組み合わせて一つのまとまりへと組み上げた。終わった時には、客席から盛んな拍手があった。

ここで、RTV（リアル・タイム・ヴィデオ）によるリフレクションが神戸芸術工科大学曽和具之准教授によって行なわれた。朝からの活動を撮影して６分程度のフィルムにまとめたもので、上映後、参加者全員から大きな歓声が沸き起

こった。
　その後、グループ・ディスカッションによる学生の振り返りを行なった。特に、子どもの自由な発想に対する驚きや、皆で音楽を作り上げる楽しさについての新鮮な印象等が表明された他、参加者全員の意見をバランス良く取り入れていくにはどうしたらよいか、どういった問いかけをすれば子どもから意見が出やすくなるのかなど、今後の課題に繋がる質問が多数出された。
　なお、日本に招聘した２名に対しては、日本伝統音楽の理解を得るため、琴と三味線のレッスンが３日間に渡って２時間ずつ行なわれた。また、学内施設を利用することで、宿泊費の節減を図った。
　今後は、2013年２月に日本側の学生３人を英国ギルドホール音楽演劇学校に派遣して、同校のリーダーシップ･コースの活動等に関わらせる予定である。

〈学生のことば〉

・ワークショップというものに初めて参加しましたが、これを機にこれから積極的に参加したいと思いました。最終日に実際に子どもたちを交えると、学生だけで行っているのとは全く違うように感じたので、教わることと実習の大切さを非常に感じました。私は教職の免許を取得したいと思っているので、今回学んだ積極性と、視点を変えて考えるということを活かしていきたいです。（声楽／1年）

・初めてワークショップに参加したのですが、やること全てが新鮮で、とても楽しかったです。音を作りだしてそれをみんなで1つの作品にすることは達成感があり、毎回の講座が楽しみでした。即興的に音を出すのは難しいと思ったけれど、身体を叩くだけでも音楽になって、音楽はどうにでも作れるなと思いました。人前で何かを発表したり、自ら進んで物事に取り組んだりすることの大切さを学べたと思うので、何事にも積極的に取り組めるように活かしていきたいです。（フルート／1年）

・相手のことを思いながら自分自身も表わしていく難しさと楽しさ、自由に音楽を表現することの素晴らしさを実感しました。もっと楽しんで自分を表現するには、今やっている勉強や、自分の中にある音楽の幅を広げなければならないと思いました。（オーボエ／1年）

・音楽への考えが大きく変わりました、舞台で演奏すること、楽譜に書いてあることをただ演奏することだけが音楽ではないと気付かされました。この気付きをもっといろんな人に伝えて「音楽って身近にあるんだよ」ということを伝えていきたいです。（ハープ／1年）

・「純粋さ」の大切さを強く感じましたので、周りのものに対して常に目を向けて、感じたことを受け入れることから気を付けていきたいです。何事にも素直に向き合って色々な世界を知りたいと思いました。（声楽／1年）

・リズムに合わせて自分の名前を言ったり、1人ずつリズムを考えたりする時があり、最初は嫌だなと思っていたけれど、やっているうちに楽しくなり、時間があっという間に過ぎました。私にも使えそうなアクティビティがあったので、機会を見つけて、実践していけたらと思います。（ピアノ／2年）

・少しずつ音を重ねていくことや、みんなで一つのものを仕上げていくことの楽しさを今回の講座で実感することができたので、今後音楽を続けるにあったって、音楽の本質的な楽しさを自分なりにわかっていけたらなと思う。また、人前で自分の内側をそのまま出す難しさや、自分がいかにそれが苦手なのかを一番思い知らされたので、改めて自分のことを根本から考え直すきっかけになった、自分をどうコントロールするかという一生の課題が見つかった。（ピアノ／2年）

・この講座を受けて、音楽にしても人としても、なにか一皮むけたような気がします。普段はピアノと楽譜に向かうばかりで、身体全体で音楽を楽しんだり、みんなで楽しく1つのものを作ったりすることができていなかったなと気付かせてくれる講座でした。楽譜に書いてあることや、先生に言われた通りに演奏するのではなくて、もっと自分で意思を持って演奏しようと思うようになりました。これは、講師の方が「自分達で考えて」とおっしゃった時に、自分たちのやりたい表現を初めて考えて発表することができたからです。　（ピアノ／2年）

・私はリトミックの資格を取ろうと勉強中ですが、子どもたちに、譜面のみ、理論のみの音楽ではなく、今回のように体を使って表現の幅を広く持ち、音楽の楽しさを伝えたいと思います。　（ピアノ／3年）

・ワークショップを終えた時の解放感が凄くあって、毎回自分にとって充実した時間だったのだと強く思いました。今回はワークショップ初参加の人が多くいたからか、参加者の様子が気になり、いつもより周囲を見渡す余裕がありました。固い様子の学生たちが徐々にほぐれていって楽しそうにしているのを見ることができて良かったし、日を重ねる毎に学年の壁がなくなっていったように感じます。　（ピアノ／3年）

・周りの様子を見ながら臨機応変に対応しなければならない時、講師の方々のようにぶれないように心がけたい。
（ピアノ／3年）

・ワークショップ直後のオーケストラの合奏練習で、自分の演奏の感覚が少し変化しました。講座で得たことが、自分の演奏分野にも何か活かせるのではないかと思いました。　（フルート／3年）

・ワークショップを何度か経験したためか、初日からオープンになることができ、少しずつ積み上げていく実感が持てた。今回のように神戸女学院でワークショップを受講したおかげで、普段関わりのない学生や、元々知っていた学生でも、見たことのない一面を知ることができたので、とても面白かったし、繋がりができたので嬉しかった。　（ホルン／3年）

・皆で輪になってリズムに乗っていると、自然に気持ちを開くことができ、安心して自分を表現できる気がしました。毎日セッションが終わった後は気持ちがオープンなままで、人と素直に話せるようになっていたことが嬉しかったです。また、難しい言葉や専門的な知識を介さなくても、音楽は誰とでも心を通わせ、作っていけるのだと感じられて、新鮮な体験でした。
（作曲／3年）

・5日間を通して「何でも受け入れられる環境がある」ことを強く感じました。私が以前に行ったWSでは使えそうなアイデアのみを取り入れて音楽にしていたのかと反省していました。出した／出してくれた意見から枝が何本もあっても良く、だからこそどんな音楽ができるのかわからない、それが楽しく、このメンバーで本当に今作った曲が出来上がるのだと思いました。
（ピアノ／4年）

・まず、自分をオープンにすることで楽しむことができる。その結果、自然に人が集まってくることを感じました。また、「褒めることの大切さ」を学びました。今後社会に出た時にも、何かしてほしい時は自分から殻を破って辛いことも楽しみたいです。「褒める」＝「よく観察している」ということだと思うので、周りのことをしっかり見れる人になっていきたいです。
（声楽／4年）

・一体感を生み出すにはみんなで同じ動作をする空気感を供する大切さと、自分の考えている音楽を大切に持ちながらいかに皆の前に出していくか、リズムでもオリジナルなものを持っていた方がそれなりにおもしろいんだなと思いました。　（チェロ／4年）

ギルドホール音楽演劇学校／バービカンセンター主催
Dialogue Project　参加報告

ロンドン市東部で地域活動を展開するギルドホール音楽演劇学校とバービカンセンターは、2013年の1月から2月にわたってDialogue Projectを実施した。これは、地元の小学校やコミュニティーセンターで多様な年齢層のグループを対象として音楽創作ワークショップを行い、合同で演奏発表を行うという取組である。大和日英基金の援助により、今回日本から学生3名（神戸女学院大学3年 廣瀬紀衣Fl、増田明日香Hr、東京音楽大学3年 磯野恵美Fl）と教員1名（東京音楽大学教授　武石みどり）が、プロジェクトの最後の10日間（2月18日～27日）に参加した。

4つのグループと小学校1校、中高等学校1校における活動に参加したが、どのグループにおいてもギルドホール音楽演劇学校Leadership programのメンバーが数名のチームでワークショップをリードし、曲の素材作りから組み立て、演奏へと仕上げていく点では共通していた。今回のプロジェクトでは「Seeing Things （ものを見ること）」をテーマとして、自分たちが周囲の人や環境をどのように見ているか、見えている人や物の外側と内側にはどのような違いがあるか、見方や捉え方によってどのような違いが生ずるかについてグループごとに話しながら、キーワードや歌詞を決め、旋律素材やリズム素材を確定していった。活動に参加したのが後半であったため、ゼロからアイディアを出しあって素材を作り出す過程よりも、ある程度できあがった素材の断片をどのように構成し、ひとつの音楽にしていくかという過程に主に参加した。この企画は、ギルドホール音楽演劇学校の学生にとってはリーダーシップを学ぶ実習の場ともなっており、多様なリードの方法や出来上がったもののクォリティの違いなどを実感する機会ともなった。以下に、グループごとにその内容を紹介する。

Fellow's court vocal project（週1回2時間；1月中旬から7回のワークショップを経て発表）

地域の女性10人ほどが参加。自分たちの作った詩によるコーラスを創作する。リーダーの他、ギルドホール音楽演劇学校の学生数名が加わって一緒に歌い、メンバーどうしで旋律やリズムを確認し合ったり、音量や音程を支えたりしながら曲を作っていく。これに、若者のラップとセミプロのビートボックスが加わることにより、単なるアマチュアの合唱ではなく、パンチのきいた今風の曲となる。ワークショップリーダーの役割は曲作りをリードすることに加えて、ラップとビートボックスとの関連を考え、さらに中間部に登場する地元の若者グループのヒップホップダンスをどのように組み合わせるか（ダンスの若者たちは自分たちの価値観をもっており、音楽と合わせて練習できる機会は非常に限られていた）についての配慮である。異質な音楽やグループとのコラボレーションはリスクを伴うものではあるが、最後の発表演奏はうまくいき、参加者がそれぞれ「日常の自分たちだけではできないものを創り出した」という達成感を抱くことができた。

【参加学生の感想】

このグループは、音楽を心から楽しんでいるように思えた。歌った曲の中には、彼女らの故郷について書かれた曲もあった。自分でハーモニーを作り出す人もいて、リーダーから絶賛されていた。（廣瀬）

ラップがうまくいかなかったとき、リーダーは「ちゃんとできている」「リズムが素晴らしい」「諦めずに続けて」と伝え、やる気を持続させた。相手を認めたうえで、自分はこうしてほしいという気持ちをしっかり伝えているところに“Yes, and”が実践されていることを感じた。（増田）

The Arbour（週1回2時間；1月初旬から7回のワークショップを経て発表）

The Arbourは地域のコミュニティーセンターで、住民の多くがバングラデシュやソマリア等、イスラム系の移民であることから、英語教育やロンドンでの生活支援に力を入れている。今回は女性グループが英語を学ぶことと歌うことを結びつけ、自分たちがロンドンの生活の中で抱いている思いを、一部を母国語、一部を英語の文章にして4つの歌を作った。参加者は前に出て自己主張することをためらう傾向が強く、また継続的に練習に参加する人が少なかったため意思疎通に苦労する点もあったようだが、発表日には15人ほどが集まり、ステージ上で歌って拍手を受けるという晴れがましい体験をした。

【参加学生の感想】

消極的な人が多いようだったので、特に発表の際は後ろに立ち、支えになるように声をだして歌ったり、リズムに乗りやすい曲では楽しい空気づくりを心掛けたりして工夫した。あまり前に出ないという文化に私は日本に共通するものを感じ、彼女たちも私たちをあたたかく迎え入れてくれた。発表後、みんながとても素敵な笑顔を浮かべ、達成感に満ち溢れていたのが印象的である。（増田）

St.Mungo's band（2月18日の週に連続5日×5時間のワークショップを経て発表）

ホームレス支援団体St.Mungo’sの呼びかけによって集まったホームレス、およびホームレス支援者のグループ。St.Mungo’s自体がロンドン市西部に位置していることもあり、参加者はロンドン市全域から来ており、中には電車とバスで1時間以上かけて来る人もいる。参加のための交通費も支給される。

楽器の場合は初心者であるため、一定の音型をベースで黙々と弾き続けるという形での参加が主となるが、それでも音楽の進行を自分たちが支えているという自負、間違えずに弾けるようになってきたという喜びを感じている様子が伝わってくる。実際この企画にリピーターとして参加している人が複数いた。ワークショップリーダーや学生たちは、どこでどの音型を弾くかを丁寧に教え、何度も繰り返して一緒に練習する。歌の創作においては、自分の表したい詩の内容や表現のスタイルに相当のこだわりを示す人が見られた。どのような詩や旋律にするのか、部分ごとに小グループになって話し合い、歌ってみてはやり直す過程において、学生たちはその旋律に和声や対旋律、リズムモティーフを付けて音楽に表情や安定感を与える役割を果たした。

いくつかの歌ができあがったところで、ワークショップリーダーがそれぞれの部分（A，B，C，…）

のつながりを考え、経過部分や次の部分の入りを明示して全体を構成する。発表を直前にして、ソロを歌う人が自分のスタイルにこだわるあまり、通し稽古で演奏したやり方に変更を加えることを望み、実際の発表でどのような音楽になるかわからないといったスリリングな事態となった。そのような場合でも、ワークショップリーダーは決して「打ち合わせどおり」を強要することはなく、その場での当人の演奏に耳を傾け、即興的判断で全体を導いた。一人ひとりの個性と考えを最大限尊重しつつ全体をまとめていくリーディングの根底には、参加者に対するリスペクト（敬意）とサポート（支援）という揺るがないコンセプトがあることが感じられた。

【参加学生の感想】

楽器の指導では、リーダーが「あなたはこんなリズムを叩いてみてくれない？」のように提案し、自由な発案を生かすというより指導に近かったので少し疑問を感じたが、何か役目を与えて実行させることが、彼らの日常生活での向上に繋がるとも解釈できた。（廣瀬）

初めにリーダー側から一つの主題が私たちに与えられてそのメロディーを繰り返していくなかで、リズムセクションを作り、ハーモニーを作り、対旋律を作り、歌を作りと、同じ時間にいくつもの音楽が同時に生まれていく感じでした。各セクションにリーダーとなる人物がいてさらに、それを組み立てていくのが大リーダーです。大リーダーは出来上がった音楽を何度も何度も順番に並べてゆっくり説明し、皆で覚えていく作業の繰り返しでした。練習中にメモをいちいちとるわけでもなく、素晴らしい集中力と記憶力だと思いました。スキルとしてリーダーに求められるのは、メロディーが出来上がったときに瞬時にいくつかのハーモニーづけをする能力、その逆にかっこよい不協和音を作る能力、数人で演奏する場合空気を読んで人と同じ音を吹かないこと、それから全部コード進行で考えることです。参加者が不安なく音楽を覚えて演奏を続けるために必要なのは、リーダーの放つ絶対的な信頼感と、明確な身振り手振り、次に始まる音楽との連結、合間の取り方、目で訴える力――そうした多様な要素があってこそ優れたリードが可能になるのだと思いました。（磯野）

Future band（2月18日の週に連続4日×5時間のＷＳを経て発表）

ロンドン市内から集まった8～14歳のグループ。学校が休みの時期に合わせた集中セッションで、皆自分の楽器をもって参加する。３大学夏期セミナーで教わった内容に最も近く、みんなで輪になって拍手回しやジェスチャー遊び等のアイスブレイクから開始する。30名弱の子どものなかに、7人ほどのリーダーと学生が入り、基本となる旋律を楽器で奏し、強弱・テンポの変化をつけたり、歌詞をつけたりしながら曲の部分部分を作っていく。曲の各部分は異なるリーダーがリードし、次々と指揮者が交替するかたちで大きな1曲が構成された。

【参加学生の感想】

アイスブレイクで少し和みだすと、子どもたちが案をだしてアイスブレイクに工夫をし、またそれに追加して案をだすという風に、アイスブレイクの時点からどんどん意見が出るようになっていた。その光景がすでに驚きであったが、音楽づくりが始まると尚一層意見が飛び交うようになった。はじめに旋律がいくつか与えられたのだが、一度みんなで共有した後は、自分はこうしたい、こう演奏したいなど、たくさん手があがり、日本の子どもしか知らなかった私は驚くことばかりであった。また、子どもたちだけが主役なのではなく、中に入っていたギルドホールの学生やファシリテーターが何かいい案や、身振り手振りをしていると必ず取り上げて子どもたちがどう思うか確認しており、ファシリテーターも仲間であり立場は同じであるということを気づかせられた。5人のファシリテーターが交代して曲を進行していった。ジェスチャーを使ったり、色画用紙を使ったり、それぞれ工夫をしながら子ども達にわかりやすいように

合図をしていた。ファシリテーター同士の振り返りは一日の終わりに欠かさず行われる。細かなところまでは決めてしまわないが、大体の方向性や曲のつなぎ方などは必ず共有していた。ファシリテーターと子どもたちの間の信頼関係が本当に素晴らしかった。今回、間近でみることのできた複数のファシリテーターの姿勢や、視線、身振り手振りを自分なりに消化・実践していきたい。（増田）

Morpeth secondary school band/choir

（週2回1.5時間；1月後半から9回のワークショップを経て発表）

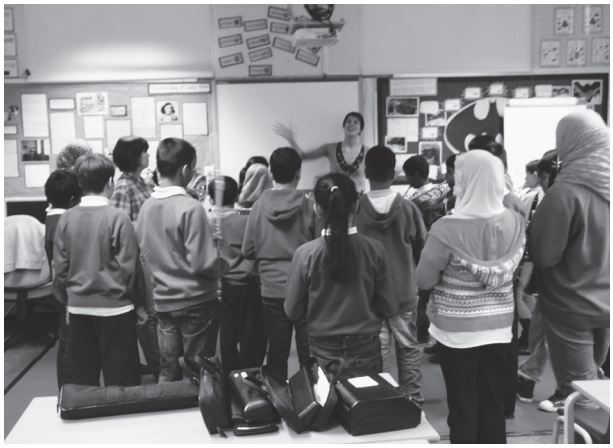
11～18歳の生徒によるバンドと歌のグループ。楽器の演奏能力には個人差がある。自分達の発案による旋律やリズム、歌詞を素材として部分部分を構成し、最終的に器楽と歌をつなげて大きな楽曲とした。途中にダンスやラップも挿入される。複数のリーダーがリードしたが、学生がリードした際にリーダーのかける言葉が説明的でだらだらと長くなり、それにともなって楽しく自由に発想することより合奏指導という色合いの方が強くなってしまう場面が見られた。リーダーが曲をどのように構成するかということに気を取られてしまうと、一人ひとりの生徒と正面から向き合う姿勢や自由な発想を取り上げる柔軟性が損なわれる。また曲の進行を言葉だけで説明するのではなく、歌や合図や仕草でわかりやすくリードしていくことの重要性がよくわかった。

【参加学生の感想】

リーダーのやり方にもそれぞれ個性があって面白いと思いました。ここで私は、リーダーシップコースで勉強するのは一緒でも導き方に「ギルドホール式」という固定したものはなく、人によって変わっていくのだと思いました。日本で導入しようと思ったときに、日本には日本なりのやり方を見つけていくくらいの柔軟性を持つべきだと思いました。（磯野）

John Scurr primary school（週2回1.8時間　1月末から9回のワークショップを経て発表）

6年生が(1)楽器 (2)歌と小楽器 (3)ＰＣの3グループに分かれて創作・演奏に取り組んだ。(3)のグループは、楽器やリモコンの振動を異なる音色に増幅し、ｉpadの操作がさまざまな音響や画像にシンクロナイズされるという仕掛けで音楽を作りだす。小学校の授業時間の中で進めるため、学校の先生も一緒に加わり、また開始と終了の時間が厳格に守られた。3つのグループはいずれも学生のリードで進められ、指示の明確さ、子どもたちの発想の取り上げ方、作り上げた音楽の内容や構成力の点でかなりの個人差が感じられた。



【参加学生の感想】

管楽器のグループにかかわりました。グループには家族というテーマがつけられていて、スペシャルママと友達の歌を歌いました。楽器は初心者なので、リーダーには合図のほかに運指の指示が必要でした。偶然トランペットの運指は知っていたのでカバーできましたが、フルート以外の木管は知らないので、今後勉強しておいたら便利かもしれないと思いました。別のグループでは楽器の中に電線を通したり、ｉpadやリモコンを駆使したりしてテクノ音楽を作っていました。アイディアとしては使えるかもしれないと思いますが、製作費と準備に時間がかかりすぎるのがデメリットです。（磯野）

最後に、今回の参加で気づいた点として以下を挙げておきたい。

・日本でワークショップの構成として「①アイスブレイク　②ワークショップ本体　③振り返り」の3段階が設定されることが多いが、今回見た限り、大人を対象とする場合①が無いことも多い。③は毎回ほとんど行わず、リーダーどうしで最後にミーティングをして創作した曲やフレーズの概要を確認し、必要に応じて楽譜を作成する。取組全体の振り返りは、数週間のワークショップが終わり発表演奏の直前に評価アンケート記入と参加者とのディスカッションの形で行われる。子ども対象のFuture Bandにおける振り返りディスカッションでは、ギルドホール音楽演劇学校Leadership programの生みの親であるピーター・レンショウ氏がわざわざ出席して、熱心に子ども達の意見を聞いていたのが印象的であった。

・学校以外の場所で行うワークショップでは、副次的要素として簡単な飲み物・食べ物の準備がされており、参加者が自由に食べて談笑することがアイスブレイクの役割をも果たしていた。雑談をしながら時を共に過ごし打ち解けていくことを重視する姿勢は、特にSt.Mungo'sのグループで顕著に見られた。今後日本でも多様な人々を対象に音楽ワークショップを展開する際、音楽のみならずこのような側面への配慮が必要である。その意味で、ワークショップを単なる音楽創作の場と狭く捉えるのではなく、人々の心を開くためにさまざまな要素を具えた場としてデザインしていく視座が求められる。

今回の参加で教員・学生ともに得た多様な示唆を今後の授業や活動に生かしていきたい。

（武石みどり）

仲道郁代学校訪問ワークショップ

ピアニストの仲道郁代氏による6カ所の小学校における音楽ワークショップに、「ミュージック・コミュニケーション」履修者を中心とした３大学の学生が参加した。これまでの学びを活かす場として、仲道氏とディスカッションをおこないながら内容を検討し、毎回異なる手法で実施した。各ワークショップは、鑑賞型（仲道氏の演奏の鑑賞が中心）と体験型（小学生たちの参加型創作活動と発表）の２つのアクティビティで組み立てられた。学生たちは主に体験型でファシリテーターとして参加し、コミュニケーション能力やクリエイティビティの向上につながる貴重な経験ができた。各ワークショップの詳細は以下のとおり。

久喜市立小林小学校（埼玉県久喜市菖蒲町小林2197番地）
実施日：2012年6月18日（月）
対象：4年生１クラス、6年生１クラス
ファシリテーター：東京音楽大学学生8名
内容：鑑賞型を全員に対し45分間、体験型を4年、6年のそれぞれに対し45分間実施した。鑑賞型では、仲道氏が曲の成り立ちについてデモンストレーションをしながら説明し、子ども達に曲の理解を深めてもらった上で演奏した。体験型では、「みんなで作ろう、みんなの歌」をテーマに小林小学校のイメージに合ったリズムやメロディーを4グループに分かれて考えた。各グループは打楽器やマリンバ等を用いてそれぞれ与えられた課題に沿って創作し、最後に１つの曲となるようつなげて演奏発表した。

久喜市立砂原小学校（埼玉県久喜市砂原1-4-1）
実施日：2012年6月19日（火）
対象：4年生2クラス
ファシリテーター：東京音楽大学学生3名、青山学院大学学生6名、昭和音楽大学学生1名
内容：鑑賞型を全員に対し45分間、体験型は１クラスずつ分かれて45分間を2回実施した。
鑑賞型では、曲や音に対する感覚をひろげる試みがされ、演奏前に曲に関連したストーリーや絵を提示するなどし、子ども達はイメージを膨らませながら鑑賞した。体験型では、「音から絵？絵から音？」をテーマに、あるフレーズから子ども達に絵を書かせた。その後グループに分かれ、子どもたちの絵を基にして音楽室にある楽器を使って音をつけた。最後にグループごとに演奏発表した。

久喜市立栗橋小学校（埼玉県久喜市栗橋東3-3-1）
実施日：2012年6月26日（火）
対象：4年生3クラス
ファシリテーター：東京音楽大学学生4名、青山学院大学学生5名
内容：鑑賞型は３クラス全体に対して45分間、体験型は３クラスそれぞれに対し45分間を3回実施した。鑑賞型では、シャボン玉やフラフープを使って音の動きを視覚的に感じてもらったり、目を閉じて演奏を聴いて情景などをイメージしてもらったりした。体験型では、「絵からストーリーとバックミュージックを作ろう！」をテーマに、用意

された絵を基に4つのグループがそれぞれ“栗橋君の冒険”というストーリーを考え、それに対する音楽を創作した。最後にグループごとにストーリーと音楽を発表した。

尾道市立向島中央小学校（広島県尾道市向島町 5979 番地）
実施日：2012年9月6日（木）
対象：5年生2クラス67名
ファシリテーター：神戸女学院大学学生12 名

内容：鑑賞型を全員に対し45分間、体験型を１クラスずつ45分間実施した。実施2ヶ月前に仲道氏と打ち合わせをし、コンセプトを共有した後、事前学習として「ワークショップ」「尾道」「仲道郁代」という３つのテーマでグループワークをして発表し合う勉強会を行った。子どもたちと共にイメージを広げて音楽作りをするためのテーマとして「向島のいいとこ教えて!」と「夏休みにしたこと教えて!」の 2 つに絞り、仲道氏側に提案を行なったところ、 前者での実施となった。 鑑賞型では、ボールやフラフープを用いて音とイメージを結びつけながら視覚的に曲を聴いた。体験型では、大きな円になってアイスブレイクを行った後、「向島のいいとこ教えて!」をテーマにグループワークを行った。子ども達のアイデアを引き出しながら音楽作りをし、鑑賞とアイスブレイクで用いたドビュッシー《喜びの島》のモティーフのリズムで繋ぐことで、《喜びの向島》というオリジナル作品にまとめあげた。

武蔵村山市立第九小学校（東京都武蔵村山市学園1-85-1）
実施日：2012年9月24日（月）
対象：4年生2クラス48名
ファシリテーター：昭和音楽大学学生4名

内容：鑑賞型を全員に対し45分間、体験型を１クラスずつ45分間実施した。鑑賞型では音のキャッチボールをしながら視覚化を試みたり、モティーフを図にして演奏時に提示したりと、小学生がイメージを拡げられるような工夫をした。体験型では、短いアイスブレイクの後、「クラスのソナタを作ろう」をテーマに「みんな」（第一主題）と「先生」（第二主題）をキーワードとした複数のグループに分かれ、モティーフを創った後、ソナタ形式の枠に組み込んで１つの曲としてまとめた。小学生たちは、ファシリテーターのリードのもと、自分たちで選んだ楽器を使って、モティーフを考えた。最後の演奏では子どもたちは達成感にあふれていた。

武蔵村山市立第十小学校（東京都武蔵村山市残堀 5-100-1）
実施日：2012年9月25日（火）
対象：4年生4クラス135名
ファシリテーター：昭和音楽大学学生3名、東京音楽大学学生4名
内容：鑑賞型を全員に対し45分間実施、体験型を１クラスずつ45分間の活動を4回実施した。前日の第九小学校とほぼ同じ内容・流れであったが、学生がアイスブレイクのリーダーを担当し、ピアノ伴奏の部分も学生が担当した。いくつか改善できるところは休み時間に話し合って、変更しながら取組んだことで、まとまりのある充実したワークショップとなった。

新聞・雑誌等掲載記事

■ WEB

Tokyo Art Navigation「東京アートーシーン」№7、８に掲載されました。
演奏者から“音楽コミュニケーション・リーダー”へ「音楽系３大学による共同プロジェクト」
（前編）http://tokyoartnavi.jp/artscene/index007.php
（後編）http://tokyoartnavi.jp/artscene/index008.php

■ 読売新聞掲載記事（2012年9月7日付）

27 地域　2012年(平成24年)9月7日(金曜日)　読売

備後

福山支局
〒720-0815
福山市野上町1-9-27
(代) 084-927-1111
FAX 927-1114

ホームページ
http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/hiroshima/

広島総局
〒730-0042
広島市中区国泰寺町1-3-20
(代) 082-243-0101
FAX 243-0103

呉支局
〒737-0051
呉市中央2-6-10 村上ビルII3-A
(代) 0823-22-5425
FAX 22-5426

通信部
原 0848-62-2920

訂正
7日の「曲作る楽しさ 仲道さん指南」で、「向島小」とあるのは「向島中央小」の誤りでした。

曲作る楽しさ 仲道さん指南

ピアニスト 尾道の小学校授業

日本を代表するピアニストとして活躍する仲道郁代さんが6日、尾道市向島町、市立向島小学校を訪れ、5年生67人に曲作りの授業を行った。

仲道さんは文化振興の一環で、数年前から、同市で演奏や訪問授業を行っている。この日は、神戸女学院大音楽学部の学生ら15人も手伝った。

子どもたちは4組に分かれて「向島の良い所」をテーマに曲作りに取り組んだ。「夏休みはプールで遊んだ」「高見山から自転車で下りると気持ちいい」などと学生に説明し、一緒に曲の構想を練ったり、鉄琴やトライアングルなどで音を確かめたりした。

最後にグループごとに曲を披露。仲道さんはピアノで4曲をつなげ、「楽器も使い方で色んな音が出ます。足で床を鳴らしても、自然の音も全部音楽です」と説明した。

終了後、仲道さんは「音楽を聴くだけでなく、曲を作って表現する喜びを覚えてもらえれば」と話し、貝原望菜さん(10)は「みんなで心を一つにして曲を作って楽しかった。もっと音楽が好きになった」と笑顔だった。

仲道さん（中央）と一緒に曲を作る子どもたち（尾道市で）

※この記事・写真等は、読売新聞社の許諾を得て転載しています。

■『教育音楽　小学版』2012年11月号掲載記事

4 音大生の未来をひらく音楽&アート

東京音楽大学・神戸女学院大学・昭和音楽大学 3大学合同夏期セミナー&シンポジウム

公開プレゼンテーション「クリエイティブ・ラーニング@東京音大」
公開シンポジウム「音楽とアートでひろげるコミュニケーションの力」

■9月1日　東京音楽大学（東京都豊島区）
■主催◉東京音楽大学、神戸女学院大学、昭和音楽大学

伊藤ひさえ
写真◉編集部

午後の公開シンポジウムでは、グレゴリー氏や湯浅氏からイギリスの先進的な事例が紹介され、新しいアートや教育の可能性が示された

午前中は「クリエイティブ・ラーニング」を学んだ学生が、講師とともに小学生とのワークショップでつくった音楽を発表した

1時間半のワークショップで創作した音楽作品が披露された。参加した小学生、学生、ミュージシャンが地上、上空、地下の3グループに分かれて「東京の街」というテーマでつくった作品である。学生がワークショップのファシリテーターとなり、参加者全員のアイデアをまとめながら、みんなで協同して音楽をつくる。イギリスで実践されている「クリエイティブ・ラーニング」という方法を学んだ学生たちのスキルが生かされたワークショップである。

地上グループでは、「テクテク、ドスンドスン」という足音や街中で聞こえる音を、楽器や声、手拍子などを使って表現した。上空、地下のグループも、それぞれの空間がイメージできる作品となった。和声感のある音楽表現もあれば、リズムアンサンブル、楽器を使った擬音、声、手拍子、身体表現など、あらゆる表現方法が使われた。子どもの発想力、学生の演奏技術、ミュージシャンの知識や専門性などが総合され、音楽的な質を上げる要因となったようだ。

ロンドンのギルドホール音楽演劇学校で、クリエイティブ・ラーニングを教えているショーン・グレゴリー氏は、人や組織をつなぐことの重要性、つまり、学校、地域、その道のプロなどがつながり、それぞれの特性や専門性を生かしながら共に創造する、というアートのあり方が今後の社会に必要だと述べた。

シンポジウムでは、今後、音楽やアートの力をどのように社会に生かしていくのか、その方法と意義について討論され、日英の先進的事例なども紹介された。演奏家を主に育ててきた音楽大学が、今、新しい道を模索し始めている。

写真奥から、モデレーター：武濤京子（昭和音楽大学教授）、パネリスト：ショーン・グレゴリー（バービカンセンター＆ギルドホール音楽演劇学校クリエイティブ・ラーニング・ディレクター）、湯浅真奈美（ブリティッシュ・カウンシル アーツ部長）、茂木一司（群馬大学教育学部教授）、津上智実（神戸女学院大学教授）

おわりに

東京音楽大学、昭和音楽大学、神戸女学院大学音楽学部の音楽系３大学による本連携プロジェクトは、平成 21 年秋から、新たな試みをさまざまに積み重ねてきました。音楽を「純粋な芸術」として終わらせずに、人々と社会に役立つものとするためにはどのような視点とスキルが求められるのか、そのためにはどのような教育が必要なのかを、３大学の教職員で共に試行錯誤してきた日々であったと言うことができます。それは、未来の音楽家のあるべき姿を志向する試みであったと言えましょう。

今年度（平成 24 年度）は、３大学の共通科目「ミュージック・コミュニケーション講座」と夏期セミナーに加えて、ロンドン市ギルドホール音楽演劇学校と日本側の３大学との間で学生の交換を実現することができました。イギリス側の訪日は 2012 年 10 月、日本側の訪英は 2013 年２月に実施され、いずれも学生たちの大きな成長の機会となりました。ここから社会に奉仕する音楽家たちが育ってくれることを願っています。

３大学のこのような試みに理解を示し、支援して下さった関係の皆様に厚く御礼申し上げます。

各大学の予算措置に加えて、今年度は大和日英基金と日本音楽財団からの助成金を頂き、イギリス側でも Great Britain Sasakawa Foundation の助成を与えられました。

最後に、これらの試みを忍耐強く、かつ情熱をもって支えてくれた３大学の連携センターならびに連携ルームのスタッフに心からの謝意を表します。

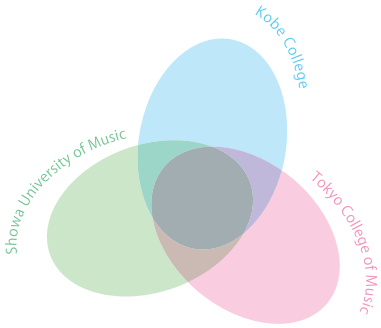
平成 25 年３月

音楽系３大学連携事業　取組担当者
津上　智実
（神戸女学院大学音楽学部・教授）

音楽系３大学による共同プロジェクト
音大連携による教育イノベーション
音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて
平成24年度　活動報告書

平成２５年３月

発　　行　東京音楽大学　連携センター
〒171-8540　東京都豊島区南池袋3-4-5
Tel: 03-3982-3513　Fax: 03-3982-3227
http://www.music-communication.com
編　　集　神戸女学院大学音楽学部　連携ルーム
昭和音楽大学　連携ルーム
印　　刷　秋田協同印刷株式会社



音楽の力、伝えるスキル。

文部科学省選定　音楽系3大学による共同プロジェクト